

東京都スポーツ振興審議会（第28期第4回）

日 時：令和5年8月24日（木）午前9時59分

会 場：東京都庁第一本庁舎42階特別会議室A

午前9時59分開会

○巻口企画調整担当部長 それでは、お揃いのようなので、若干早いですけれども、第28期第4回東京都スポーツ振興審議会を開会させていただきます。

本日は、大変お忙しいところご出席いただきましてありがとうございます。

私は、生活文化スポーツ局企画調整担当部長の巻口でございます。議事に入りますまでの間、私が進行を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

本日は、12名の委員の皆様にご出席をいただいておりますので、東京都スポーツ振興審議会に関する条例第7条第1項に基づく、開催に必要な定足数である半数に達しておりますことをご報告申し上げます。

本日の委員の皆様のご出席状況につきましては、お手元の委員名簿に記載しておりますので、そちらをご覧くださいませうでしょうか。

また、前回の審議会から委員の交代がございましたので、ここでご紹介をさせていただきます。塩見清仁委員でございます。

○塩見委員 東京都体育協会の理事長の塩見でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

本日は、傍聴で専務の角田も参っております。あわせてよろしくお願いいたします。

○巻口企画調整担当部長 続きまして、本年4月及び7月の人事異動に伴いまして、当局の幹部職員に異動がありましたので、紹介させていただきます。

技監、安部文洋でございます。

総務部長、奈良部瑞枝でございます。

スポーツ総合推進部長、小池和孝でございます。

国際スポーツ事業部長、稲垣敦子でございます。

スポーツ施設部長、梅村実可でございます。梅村は、本日オンラインでの参加となります。

それでは、まずはじめに、生活文化スポーツ局長、横山より一言ご挨拶申し上げます。

○横山生活文化スポーツ局長 生活文化スポーツ局長の横山でございます。本日は、ご多忙の中、第28期の第4回東京都スポーツ振興審議会にご出席を賜りまして、誠にありがとうございます。会議に先立ちまして、一言ご挨拶を申し上げます。

今年5月にコロナが5類相当ということで移行をされて以降、スポーツにおきましても各種大会が再開をされまして、フルスタジアムかつ声を出しての応援が可能になるなど、盛り上がりを取り戻してきております。

国内外の国際大会といたしましては、世界水泳が行われ、女子サッカーワールドカップ、そして現在は、ブダペストにおきまして、世界陸上での熱戦が続いております。さらに、来月には、ラグビーワールドカップのフランス大会ということで、多くの方がスポーツの魅力を再認識する年になるというふうに感じております。

東京におきましては、2025年に開催をされます世界陸上とデフリンピックに向けまして、大会運営組織が立ち上がりまして、大会の準備が本格化しております。東京都といたしましても、ガバナンスの確保をサポートしていくとともに、両大会を通じて、情報保障や都民の健康増進等の面でレガシーを創出してまいりたいと考えております。

さて、第28期の審議会が始まりましてから、間もなく2年ということになります。振り返りますと、東京2020大会を終えまして、大会のレガシーの活用を含む大会後のスポーツ振興について、委員の皆様から貴重なご意見を賜りました。

また、昨年1月に公表いたしましたT O K Y Oスポーツレガシービジョンにつきましては、スポーツ施設の活用やスポーツの場の拡大、パラスポーツの振興など、ご示唆に富んだご意見をいただきまして、様々な施策を充実することができました。

本日は、前回のスポーツを「する」、「みる」に続きまして、「支える」についての取組、そして、今期の総括についてご審議をいただきまして、忌憚のないご意見を頂戴したいと考えております。

現行の東京都のスポーツ推進総合計画は、来年度で計画期間が終了します。委員の皆様からいただいたご意見を踏まえながら、東京のスポーツのあるべき姿を見極め、一層議論を深め、よりよい政策に結び付けていきたいと考えております。

本日は、限られた時間ではございますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

○巻口企画調整担当部長 次に、資料のご案内をさせていただきます。本日、議事で使用する資料は、お集まりの皆様には、お手元のタブレット端末に、オンラインでご参加の皆様には画面上に映してご説明いたします。

タブレット端末につきましては、画面をタッチいただくと、右上に「同期」、「非同期」のボタンが表示されます。現在は「同期」状態となっており、説明者の説明に合わせまして、画面が自動的に切り替わります。

「非同期」を選択しますと、説明者の説明とは別に、ご自身の操作で適宜資料をご覧いただくことが可能となります。その際、右下に表示される「発表する」、「退席する」のボタンには触れないようお願いいたします。資料をご覧いただいた後は、「同

期」状態に戻していただきますようお願いいたします。

横長の資料につきましては、タブレットを横向きにさせていただきますと、資料を大きくご覧いただけます。端末操作についてご不明な点がございましたら、お近くの職員にお声がけください。

オンライン参加の委員の皆様につきましては、事務局で資料を映しますので、そちらをご覧くださいませうか。

なお、お集まりの皆様の机上には、「次第」、「東京都スポーツ振興審議会第28期委員名簿」、「座席表」がございませうので、適宜必要に応じてご覧ください。

また、委員の方々には、T O K Y O パラスポーツ F O R W A R D のチラシをお配りしておりますので、後ほどご案内させていただきます。

資料の説明は以上でございませう。

次に、本日の進め方でございませうが、次第に記載のとおり、報告事項1件、審議事項2件の順で進めてまいります。報告事項は、「国際スポーツ大会への東京都の関与のガイドライン」の改定についてです。

報告が終了いたしましたら、審議事項に移らせていただきます。審議は、スポーツを「支える」活動、第28期東京都スポーツ振興審議会の総括の2点について、皆様からご意見を頂戴したいと思います。

それでは、ここから松尾会長に進行をお願いいたします。よろしくお願ひいたします。

○松尾会長 皆さん、おはようございませう。本日もどうぞよろしくお願ひします。また、オンラインで原委員もご参加いただいております。原委員、どうぞよろしくお願ひします。ありがとうございます。

それでは、次第に沿いまして、議事を進めさせていただきたいというふうに思ひます。

それでは、事務局のほうから報告事項の説明をお願いしたいと思ひます。よろしくお願ひします。

○齋藤事業調整第一課長 よろしくお願ひいたします。国際スポーツ事業部事業調整第一課長の齋藤と申します。よろしくお願ひいたします。

「国際スポーツ大会への東京都の関与のガイドライン」の改定についてご説明をさせていただきます。

昨年度末の審議会でご報告いたしましたとおり、都は、今後の国際スポーツ大会における大会運営組織が公正で信頼されるよう、昨年12月に法律等の専門家から成る有識者

会議を設置いたしまして、有識者からの助言を反映したガイドラインを策定いたしました。

ガイドラインの策定後の状況変化といたしまして、本年3月に国において「大規模な国際又は国内競技大会の組織委員会等のガバナンス体制等の在り方に関する指針」が策定されました。

その後、国際スポーツ大会を取り巻く環境や、国の指針なども踏まえまして、有識者との意見交換を進めながら、本年6月にガバナンスの更なる強化に資するガイドラインの改定を行いました。

改定内容といたしまして、大会運営組織のガバナンス確保に向けた体制整備について、ガイドラインにおける5つの着眼点を軸に改定を実施しております。

資料に記載のとおりでございますが、役員等の適切な選任、コンプライアンスの確保、予算・契約・調達の内部統制、外部チェックの仕組み、利益相反に伴う問題の防止、情報公開それぞれの項目について、国の指針における記載例も踏まえて、有識者会議の委員の方々と意見交換を行い、大会運営組織の取組例として、項目の追加や新設を行ったところでございます。

今後も国際スポーツ大会をめぐる社会状況等が様々に動くことも想定されますため、国の動向等も踏まえ、必要に応じて本ガイドラインの内容を精査してまいります。

資料といたしまして、改定後のガイドライン本文もお付けしておりますので、後ほどご覧いただければと思います。

資料のほうは、こちらがガイドラインという形になっております。

なお、2025年に開催を予定しております世界陸上、デフリンピックについて、前回の審議会からこれまでの間、開催に向けた準備が進んでおります。

世界陸上については、7月に大会運営組織である「一般財団法人東京2025世界陸上財団」が設立され、大会準備が本格始動いたしました。

また、デフリンピックについても同様、4月に大会運営組織が立ち上がりました。また、一昨日の8月22日には、大会概要を公表しております。大会概要について、参考に公表されました資料をお付けしておりますので、後ほどご確認をいただければと思います。

都としても、引き続き都民の皆様のご理解を得ながら、開催に向けた取組が進むよう、ガイドラインの趣旨を踏まえ、両大会の運営組織と連携して取り組んでまいります。

加えて、都といたしましては、今月18日に開設したWebサイトをはじめとする様々な情報発信や、2年前を契機としたイベントの開催など、気運醸成の取組を進めるとともに、両大会を契機としたユニバーサルコミュニケーション技術の開発や社会への普及を進めるなど、都民参画の機会やレガシーの創出に向けた取組を推進してまいります。

説明は以上でございます。

○松尾会長 ありがとうございます。これは非常に重要な件かと思えますけれども、報告事項についてご発言のある方はいらっしゃいますでしょうか。

ちょっと一言だけ。ご発言に当たって、本日会議室にお集まりいただいている方については、今、先生に手を挙げていただきましたけど、挙手の上、私がお名前を申し上げましたら、目の前のマイクの右側のボタンを押していただくと、マイクが入りますので、そのご発言後、もう一度ボタンを押していただくとオフになるということでございます。

また、原委員におかれましては、何かご発言がある場合には、挙手ボタン、あるいはお声掛けいただいても結構ですけれども、お声掛けいただいて、私のほうからお名前をお呼びした後にお話をいただければと思います。よろしくお願いします。

では、早速ですけど、宮地委員、お願いします。

○宮地委員 「国際スポーツ大会への東京都の関与のガイドライン」について質問があります。お聞かせいただければと思います。

国の指針に基づいて、東京都の新しいガイドラインを改定したということですが、東京都はデフリンピックもありますし、世界陸上もありますし、これから多くの国際大会を招致して実施していくことになると思いますが、この国の指針と東京都の指針で、こういうところが東京都の指針は一步進んでいるよとか、特徴的だよと、そういうところがあれば是非教えていただければ。やはり東京都は一番こういうことを多くやる場所ですので、重要なポイントだと思います。よろしくお願いします。

○松尾会長 お願いします。

○齋藤事業調整第一課長 宮地委員、ありがとうございます。ガイドラインといたしまして一番特徴的なところがございますが、ガバナンスの確保というところはもちろんなんですけれども、東京都と一緒に東京都のスポーツ振興と言いますか、そうしたいろいろなレガシーですとか、未来の東京につながる活動を一緒にやっていただくというところも踏まえて、一緒にそれをやっていくというところがガイドラインに記載されているというところは、国の指針とは異なっているところかなと。ガバナンスを前提にし、一緒

に東京のスポーツ振興をしていくというところが違うところかなというふうに思っております。

○宮地委員 分かりました。ありがとうございます。

○松尾会長 大丈夫でございますか。ありがとうございました。

それでは、ここから審議事項に入ってまいりたいというふうに思います。

本日は、先ほどお話もありましたけれども、スポーツを「支える」活動、それから、第28期の東京都スポーツ振興審議会の総括、この2点について皆様からご意見を頂戴したいというふうに考えてございます。

まずは、スポーツを「支える」活動から審議をしたいというふうに思いますので、まずは事務局のほうからご説明をいただきたいと思います。よろしくお願いします。

○平野計画担当課長 それでは引き続きまして、資料2をご覧ください。委員の皆様にご意見をいただく時間を十分確保するため、要点のみご説明することをあらかじめご了承くださいと思います。

前回の審議会で、スポーツを「する・みる・支える」の3つの視点のうち、「する」、「みる」の視点でご議論いただきましたので、今回は「支える」の視点でご意見をいただければと思います。

まず、スポーツを「支える」活動の実施率について簡単に説明いたします。

都民のスポーツを「支える」活動の実施率は、コロナ禍でスポーツ活動が制限された2021年に11.7%と落ち込んだものの、2022年には14.9%に復調しております。しかしながら、目標の20%にはまだ届いていない状況となっております。

活動の内容を見ると、「子供の運動クラブ等の運営・支援」が5.3%で最多、その他「サポーター活動などのアスリート・チームの応援」や「スポーツイベントでのボランティア」、「寄附・クラウドファンディング」等の活動が行われています。

このうち、東京2020大会のレガシーでもあるボランティアなどについては、今後の大規模スポーツイベントの開催も見据え、未来に受け継いでいくことが重要と考えております。

また、スポーツを「支える」活動をしなかった理由を見ますと、「機会がないから」、「情報がないから」、「身近に実施している活動がないから」などの理由が上位に挙がっており、活動の機会や情報の提供が重要であるというふうに推察されます。

以上の状況を踏まえ、都が実施している事業を見ますと、まずボランティアについて

は、「東京ボランティアレガシーネットワーク」、それから、「T O K Y O障スポ&サポート」という各サイトでボランティアへの活動機会の提供・情報発信を行っております。

続いて、下段にあるスポーツ指導者等の人材育成やアスリートの地域での活動支援ですが、まず指導者については、スポーツ推進委員研修会やパラスポーツ指導員養成講習会等を実施しております。

また、アスリートについては、東京都が広報・応援することで、地域での応援気運を醸成するとともに、アスリートが地域のイベントなどを通じて、スポーツの普及などに貢献することを後押ししております。

以上、駆け足でのご説明となりましたが、最後にご意見を頂戴したい論点をまとめております。より多くの都民にボランティアやアスリート・チームの応援、スポーツ指導者、寄附等、スポーツを支える様々な活動に取り組んでもらうためには、どのようなアプローチが効果的か、忌憚のないご意見をいただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○松尾会長 ありがとうございます。「する・みる・支える」という中で、「支える」という一つのスポーツ文化をどうやって広げて、どうやって定着させていくかというのが非常に大きな論点にもなっている。その中であって、現状と課題について、少しまとめてご報告をいただいたところでございます。

これについて、今の説明を受けまして、皆様方からご意見を頂戴できればと思いますが、時間も限られておりますので、この総括のところについては、皆さん、全員お一方ずつお時間をとってご発言いただければと思いますけれども、この点については、まず最初に何名かの委員の皆さん方に少しお願いして、お話をいただくようにできればというふうに思います。

まず、一般社団法人の日本パラリンピアンズ協会の会長でもいらっしゃいますし、パラスポーツの視点から、大日方委員のほうからご発言いただければと思いますが、いかがでございましょう。

○大日方委員 おはようございます。ご指名いただきましてありがとうございます。よろしくお願いいたします。

私は、初めに言います、アスリートとして応援がどれだけ大きな力になるかということをお話をしたいと思います。古い話で恐縮ですが、1998年の長野パラリンピッ

クで金メダルを獲得できましたけれども、それはまさに応援の力だったというふうに私は思っております。当時、パラリンピックを取り巻く環境というのは、今とは大きくかけ離れたもので、あとパラリンピックということも行われることそのものがほとんど知られていない状況ではありましたが、皆さんが急にパラリンピックの直前に関心が盛り上がって、現地に駆けつけてくださった。そういう中で、私たち選手も想像もしていなかったような応援を大きく受けることができました。

アルペンスキーをやっておりますので、山の上からはるか下のほうに観客席があるんですけれども、この観客席から聞こえてくる応援の声が地響き、地鳴りのように聞こえてきて、ここに絶対行きたいなというふうに思ったわけですね。何とかゴールをしたいというその思いというのは、自分を駆り立ててくれたし、力になってくれた。結果的に、それが金メダルにつながったというような、そんな体験をしております。東京大会が開かれたときにも応援の力というものがどれだけ選手にとって大きな力になるのかということをお話をしておりました。

こういった点から、是非「支える」ということのすばらしさというのを、都民の方たちにも伝えていただきたいと思います。

そして、また平昌のパラリンピックのときには、日本選手団の団長をさせていただきましたけれども、そのときにもボランティアの方々との交流というのが、大変感心、面白いものでした。選手時代だと、なかなか触れ合うことができない、時間的にも余裕もないんですけれども、団の一員になると、ボランティアの方たちがどれだけ支えてくださっているのか、そして、その方々が日本をどう思っているのかとか、韓国の今の文化とか、若い人たちはこんなふうに考えているんだというようなことを、かなり交流することができて、これがまた面白いんだなと思い、彼らもまた、日本の選手団と触れ合うことで、力をもらっているし、とても楽しんだということを書いてくださっていて、是非こういう機会を今度またデフリンピック等がありますけれども、都民の皆さんには支えることの醍醐味、そして支えられることによってどれだけアスリートが力を持つかということを是非伝えていっていただきたいと思いますというふうに思っています。

○松尾会長 なるほど。ありがとうございます。一つのポイントとして、こういう応援をするという力、応援の文化ということに触れていただきました。なおかつ、やっぱり交流というキーワードが非常に重要なんじゃないかというお話がありましたけれども、今後は支える人たちをいろんな角度から増やしていきたいし、そういう文化を定着させて

いきたいというのが今回の狙いですね。そこの交流を深めていくという意味での考え方とか、アプローチの仕方で何かヒントはございましょうか。

○大日方委員 これもまた長野パラリンピックのときのお話になりますけれども、当時、一校一国運動というのがありまして、各小学校や中学校がそれぞれ応援する国を決めて応援しようということで、私の友人はアメリカの選手だったんですけれども、彼女は98年の長野を経験して、学校に訪問に行ったそうなんですけれども、そこで自分のことを生徒さんたちがすごくよく知っていて、自分の過去の成績のことであるとか、発信してきたこととか、その当時そんなにたくさんの情報がなかったにもかかわらず、一生懸命調べて、いろいろな質問をして応援をしてくれた。これがすごくうれしかった。子供のほうもアメリカってどういう国なんだ、障害者のスポーツってこういうことをやっているんだよねみたいなことで、とても勉強になったということで、是非こういう、この国のこの選手を応援しようとか、そういうのを小学校や中学校などで、ある地域などで決めてやっていくということ、特にデフリンピックは、なかなか個別の選手を見るとか、応援する対象はどんな方なんだろうとかということが分からないままにぼんやり応援するよりも、実態であるとか、その人のバックグラウンド、あるいはその国のことを調べて応援していただくというのは、応援する側の楽しみもより広がるのではないかなということで、是非ご提案させていただきたいと思います。

○松尾会長 なるほど。ありがとうございます。大変よく分かりました。ぼんやり応援するんじゃなくて、国やバックグラウンドなんかもしっかり分かった上で応援するとやっぱり意味が変わってくるし、一校一国運動の動きについても新しいこれからの取組のヒントになりますね。ありがとうございます。

それでは、まちづくり研究などを行われるなど、地域の活性化に非常に造詣の深い上代委員のほうからコメントをいただければありがたいと思います。お願いします。

○上代委員 上代です。よろしくお願いいたします。まちづくりなのかちょっと分からないんですけれども、私のほうから2点少しお話をさせていただければと思っております。

まずは、「支える」という概念を少し変えていくことも必要なんじゃないかなというふうに思っております。そしてもう1個は、その「支える」人たちにとって、何かメリットを感じさせるということも必要なのではないかと思っております。

まず1点目の「支える」なんですけれども、もう今多分皆さん、「支える」というと、ボランティア活動をしなきゃいけないんだ、ボランティアにならなきゃいけないんだと

いうふうに思っている方というのも多いと思うんですよね。実は、私、昨日甲子園まで試合を見に行っただけですけども、大応援団が来ておりまして、あれはまさに支えている人たちだとは思いますが、彼らはもちろんボランティアではありませんし、純粋に応援をしている。そういう親御さんって日本の文化、今までも多々あって、それこそ少年団なんて親御さんが支えていることで今までも発展してきた日本の文化の一つだと思いますし、決してボランティアという大きなことをしなくたって、身近なことからできるんだよという、少し概念を変えていくようなアプローチというの必要なのではないかなと思います。

また、それが例えば、選手の雇用も同じでして、選手のことを知ってもらって、この人を応援したいと思ってもらえれば、選手を社長さんに雇用してもらって、これも立派なアスリートの雇用につながっていくんだと思うんですよね。

なので、そのためにも、応援したいと思えるような、先ほどの一校一団運動のお話もそうですけれども、そのきっかけづくりをこちらから何かして行って、そして、「支える」って難しいことじゃないんだよということを少し知らせていくのも重要なのではないかなと思います。

あとは、もう1個メリットで言いますと、別に金銭的なメリットを付与しろということではなくて、例えば、ボランティアでも応援でもそうですけれども、一緒に何かをして楽しいなということもメリットですし、また、少し古いお話ですけど、2002年、サッカーワールドカップを日本で開催したときのボランティアの調査の結果があるんですけども、韓国のボランティアさんと日本のボランティアさんって明確に参加した理由が違っておりまして、日本の場合は、ワールドカップに関係したいというような気持ちが非常に強い方が多いんですよね。韓国の場合は、社会貢献ですとか、自分の成長とかそういうものがあったりするんですけども、この大会に自分も関係していたんだというふうに思いたいという、それすらもメリットの一つだとは思いますが、あとは、一緒に、楽しそうという、楽しいという気持ちですらメリットになると思うんですよね。なので、ただ、金銭を与えるということではないんですけども、何かメリットをもう少し前面に出していく、その2点が今後必要になっていて、「支える」ということのハードルをまず下げてあげる、そこからスタートするのがいいのではないかなと思っています。すみません。長くなりました。

○松尾会長　ありがとうございます。笹川スポーツ財団さんなんかや国の調査によると、

スポーツボランティアの実施率がやっぱり6から7%ぐらいのところを推移していて、東京都さんで14.9%と、高いようですけれども、もっと実は、多分私たちが今、委員がおっしゃるように、ボランティアを考えるときに、指導者としてでしょう、大会のボランティアでしょうみたいな、いくつかボランティアの枠があって、その枠以外のものは、例えば、みんながのど渴いているだろうからお茶を持って行ってあげるみたいなことは、ボランティアには含まれないんじゃないのみたいな、そういうような印象もある可能性があって、ちょっと固いなというか、それをもっと柔らかくすればというお話かと思えますけれども。例えば、こんなものもボランティアになるし、こういうものも広げていったらどうだというようなところでのご示唆はございますでしょうか。

○上代委員 ボランティアという言葉自体、定義、笹川なり、国なりもちゃんとしておりますけれども、あちらの定義の一つに、自分のエネルギーを出すとかという、そういうことがあるので、どうですかね。それこそ、先ほど先生がおっしゃいましたけど、地域の子供たちがスポーツをやっているから、ちょっと夏だったら暑いし飲料をとか、じゃなければ、隣が公園だから日陰を提供してあげるとか、そういうことでも十分なのかなとは思いますが、どうですかね。

○松尾会長 例えば、あるいは、ここに寄附と書いてありますけれども、もう少しドネーションというか、チャリティも含めてですけれども、そういう支援の仕方もあるのかなと思ったりしますが、いかがでしょう。

○上代委員 そうですね。なので、もう今、先生もおっしゃいましたけど、自分ができる形、力を自分の労力のほうを何かできないのであれば、金銭的にでもそうですし、先ほども申しましたとおり、雇用というののももしかしたら金銭の付与にも入ってくるのかもかもしれません。

うちの学生にもいるんですけど、パラリンピアンでパリを目指せるレベルの子でも就活に非常に苦労していたりするわけですね。結局その決まった子も社長さんときちんとお話をして、理解をしてもらって、この子を応援したいというふうに思ってもらったからこそ、応援してもらえる立場になった。それって、社長さんはこの子を応援したいというふうに思ったからしてくださったんだとは思いますが、その機会をつくれたことというのが非常に大事だとは思いますが。

繰り返しになるんですけど、そういうような、これも実は「支える」ことなんだよということを広く理解してもらおうということが、今後非常に重要になってくるなと思

います。

すみません、お答えになっていないかもしれませんが。

○松尾会長 いやいや、ありがとうございました。貴重なご意見をありがとうございました。

それでは、藤田委員のほうから、藤田委員は障害者スポーツにおけるスポーツ社会学の専門家でございますけども、そういう観点から是非ご示唆いただければと思います。お願いします。

○藤田委員 2点申し上げたいと思います。1点は、ボランティアとか「支える」というのは、押しつけになってはいけないと思うんですね。なので、これをやってみたいなと思えるようないろんな機会を、いろんなイベントの中でこんなことをやれるんだよというのが分かるような示し方というのも一つ必要かなというふうに思います。

ですから、スポーツ振興の中で、ボランティアも結局増えていくと思うし、皆さんも理解していただけると思うので、何か特別これをやってというのではなくて、スポーツを広めていく、関心を持ってもらう中で広がっていくのが一番いいのかなというふうに思います。

これが1点目と、もう1点は、ボランティアをやったりリスペクトする考え方というんですかね、それが必要だと思うんですね。選手なんかは、もちろんありがたいという気持ちがあるんですが、ボランティアって誰に使われているかという、大体競技団体のもとでやっているんですね。その競技団体、実は私の大学の学生も大分パラでお手伝いさせていただいたんですけども、どの方につくかでものすごく違うんです。

なので、使う競技団体とか、そういったところの人たちがしっかりボランティアの相手をできないんだという、リスペクトしてくれるような、ボランティアをやっているほうも気持ちよく終われるような、もちろんうちの学生はそれでも誰一人文句を言わず、非常に良かったと帰ってきていましたけども、周りの引率していた教員から聞くと、これはというようなことが結構あったみたいなので、そういうボランティアをリスペクトしていくという文化というんですかね、そういう考え方が広まっていくことが必要かなというふうに思いました。

あと、先ほどのメリットという話ですけども、これは大分古いんですけども、1996年のアトランタパラリンピックのときには、開会式のリハーサルをボランティアの人みんなに見せてあげていたらしいんですね。こう盛り上げてやってねという、それで各部署

に行く、ただし、さっきの中身は内緒だよと。そんなことも、何かそういうさっきおっしゃった良い思いができるところもあっていいのかなというふうには思いました。以上です。

○松尾会長 なるほど。ありがとうございます。今やってみたいなのというのと、ボランティアをリスペクトするのと、非常に重要な視点だと思いますけど、具体的に、例えばこんなのを東京都さんで取り組んでみたらどうなのというようなアイデアがあったら、お教えください。

○藤田委員 一つは、やっぱり競技団体の皆さんへの研修とかそういった部分ですよ。どういう形でできるのかというのは考えなくてはいけないと思うんですけども、やらせて当たり前で、お前ら動いて当たり前で、ちゃんと言うこと聞けよというようなものでは、続けてボランティアをやらしてもらえないと思いますので、そういう関係者への講習というのは一つ必要かなというふうに思います。

○松尾会長 なるほど。ありがとうございました。非常に重要なご指摘をいただきましてありがとうございます。

それでは、本日からご参加いただいておりますけれども、スポーツ振興事業を実施なさる体育協会として、幅広い視点からこの点についてご示唆いただければと思いますが、いかがでございましょう。

○塩見委員 まず、今までの話を聞いていますと、狭義のボランティアと言いますか、支えるのはいろんな形がある中での、いわゆるスポーツイベントのボランティアということでお話をさせていただきますと、私はスポーツ文化事業団の理事長もしておりますので、そういう意味では、ボランティア文化を定着させる前提として、やはり場と機会をしっかりと提供していくということが大事だと思っております。

事業団では、スポーツフェスタだとか、T O K Y O ウォークなどのイベントで、いわゆるレガシーネットワークを活用して、ボランティアを募集しております。参加したボランティアの人たちは、2020大会のユニフォームを着て、やはりそれを誇らしげに活躍をされているということもありますので、それは一つのきっかけになるだろうということだと思います。

あと、藤田先生のお話にもあったように、やはりいろんな競技団体内の主催者側だとか、大会のイベント側が、ボランティアに何を戦力としてというか、求めていくかというのをしっかり、それがリスペクトという話だと思うんですが、それと同時に、ボラン

ティアをする側も自分のモチベーションをどうやったら高められるのか、こういうことをやってみたい、その2つがマッチングすることが非常に大事だというふうに思っています。

もう一つ、その「支える」中での指導者育成というか、指導者の問題なんですけど、これは、体協のほうでいろんな指導者育成のためのものの取組というのはやっているんですが、これは全体として、例えば競技団体なり、地区体協なりが、その中でスポーツをやる中では、何とか現状それなりにうまくはいつているんですが、今日的な問題である学校のクラブ活動の受け皿の問題とかになりますと、一体その指導者がどうやって本当にいるのか、マッチングできるのかというのは、なかなか今後の課題として、かなり難しいだろうというふうに思っています。

そういう意味で、どうやったら全体スポーツを支えていけるかというのが、やはりまだまだ課題があるなというふうに思っています。とりあえず以上です。

○松尾会長 ありがとうございます。ボランティアの、要するにお願いする側とやりたい側と希望のマッチングみたいなのところも非常に重要なんじゃないかと、非常に重要な指摘だったというふうに思いますし、指導者問題は大きいですね。

特に学校運動部活動の地域移行、地域連携の話というのは今年から始まっておりますけれども、それは全国ですったもんだというか、喧々諤々今やっているところでございますけれども、指導者をどうやって確保していくかということが非常に大きな問題だと思いますけれども、いかがでしょう。

実際に体育協会さんとして、現状というか、やっぱり課題というのは、こういうところは大きいというのがあればお話いただければと思いますけど。

○塩見委員 地域スポーツ、私ども体協側でやっている指導者だとか、その現状と、今教育庁側での現状をようやくお互いに意見交換して、こうやってきて、なかなかこれは難しいなど。

言ってしまうと、なかなかすぐマッチングさせるのは難しいんだと、そういう現状が分かってきたところで、はたまたじゃあ次からどうしていくかというのは、かなりやっぱり問題だと思うんですね。

各都道府県の体協さんなんかの話を聞くと、やっぱりスポーツは学校クラブ活動でしっかりやりたいという県もあって、何で地域移行なんかするんだみたいなのところもある。ただ、競技団体によっては、学校にクラブがそもそもないようなスポーツは、地域に既

に出されているみたいなものもありまして、教員の働き方改革なのかどうかという問題も含めて、やはり今後かなり馬力をかけていかないと、解決するのは難しいなど。

私どもも正直言って、じゃあ次どうしていくかというのは非常に悩んでいる。申し訳ないけどそんな段階であります。

○松尾会長　ありがとうございました。問題意識を皆さん方で共有しながら、これからどうしていけばいいのかというのを本気で考えるべき時期に来ているということですね。

ありがとうございます。非常に重要なご示唆をいただきました。ありがとうございます。

それでは、今度は、指導者のお立場から、アスリート支援という意味においての点も含めて、原委員のほうからご示唆いただければと思います。原委員、よろしくお願いします。

○原委員　おはようございます。大丈夫でしょうか。

○松尾会長　大丈夫です。

○原委員　先ほど、「支える」というところで、機会がないからという理由が一番28.3%と高い比率であったようにデータで出ているようですけれども、その背景には、僕はスポーツヒエラルキーというものがあるのかなというふうに思うんです。

と言いますのも、支える一つの方法として、一般的には、当該スポーツ、競技団体によって、そのスポーツ組織を支えるという側面が一つあるかと思うんですけれども、じゃあその人たちというものは、そのスポーツ、例えば陸上競技に例えるならば、中学校のときに競技者が一番多いわけなんですけれども、じゃあ高校に上がって、大学に上がって、社会人に上がって、徐々にそこに携わる方々というのは少なくなってくるんですね。

それは、大きな理由の一つとしては、やっぱり競技実績、いわゆる選手としてどう活躍したかによって生き残るか否かというのが決まってきて、その協会に入ってくる人も、最後、競技レベルの高い者がそこに入ってくるというような形で支える人材になってくる。じゃあ、それは漏れた人については、なかなかそういったことができないという構造があるのかなというふうに思う。だから、機会がないからというところが28.3%にとどまっているのかなというふうに思います。

じゃあ、もう一つの観点で言えば、切り口で言えば、競技を、例えばサッカーが好きな選手が、自分は身体能力がない、でも、僕はサッカーが好きだ、でも競技実績がない

からサッカーを支えることができない。果たしてそうなんでしょうかという論点があるかと思うんです。

実は、私は青山学院の地球社会共生学部でキャリアデザインセミナーという担当講義を持たせていただいているんですけども、青山学院大学では、皆さんご存じのように体育学部は持っておりません。じゃあ、体育学部に所属しない私どもの学生が、当該スポーツ、様々なスポーツを支えることができないのかといたら、決してそんなことはないんだよということを学生たちに伝えているんですね。

例えば、マスコミ業界に就職して、テレビ番組をつくっていく。これも一つ支えることですよ。あるいは、広告代理店に入って、スポーツ番組をスポンサードとして支えていくこともできるよ。あるいは、将来経営者となって、スポーツ関係に資金を援助して支えることもできる。あるいは、審判員として支えることもできる。スポーツメーカーに就職して支えることもできる。これから始まろうとする地域スポーツ活動、中学校の地域課題スポーツ活動を通して支えることができる。必ずしも、スポーツをやっていないくても、あるいは当該スポーツで最終形まで残らなくても支えることというのはできるんだよということを学生たちに伝えているんですけども、はっと何か学生は気付かされるんですね。そういった支え方もあるんだな、何もスポーツ選手で、一流な選手だけが支えるわけではない、協会に入って支えるだけではないんだという、はっと気付かされる部分があるということの反応を学生のほうからいただいているというような状況でございます。そんな形の、ちょっと総論を言わせていただきました。

○松尾会長 ありがとうございます。それこそ競技団体的に言うと、非常に競技レベルの高い方はどんどん競技団体を支えて、それ以外の方はなかなかそこには入れないという状況があるというベースに、そういうことをベースにしながら、もっともっと幅広い支援ができるはずだというご指摘をいただきました。そういうときに、例えば、東京都で今後こんなことをやってみたらどうだと、もしかすると、原委員のほうからキャリアデザインセミナーをやっていただくということもあるかもしれませんけれども、何かそういう具体的な、こういうことをやってみたらどうだというアドバイスはいただけますでしょうか。

○原委員 やはりそういった責任ある、協会等との責任ある方々が入り込むハードル、これは精神論になるかもしれませんが、ハードルが下がれば下がるほど、簡単な話、入りやすくなるわけですね。

ですから、言葉がちょっと過激な言葉になるのかな。あまりマウントを取るわけではなくて、みんなが融合できる文化をやっぱり各競技団体の責任者たる者が考えていく必要があると思うんです。伝統のある業界ほど、やっぱりマウントの取り合いという側面があるかと思うんです。

例えば、私はトライアスロン協会の理事にさせていただいているんですけども、新しい競技団体は、私のように陸上競技業界の人間もその理事に加わったり、多方面から一定数理事に加わっているんですね。その当該競技種目の方だけではない、幅広く意見を聞くという文化があるわけなんですけれども、そういう一定数の文化、一定数の違う分野からもそういった理事、要職に就く、そういう考え方を制度設計するのか、そもそも考え方をそういうふうに着させていくのか、持つ必要があるのかなというふうに感じますね。

○松尾会長 ありがとうございます。大変貴重なお話をいただきました。ありがとうございます。

以上、最初に委員の皆様方からのご発言をいただいたところですが、いやいやこういうこともあるんじゃないの、この辺はどうだというところがあれば、今度はもう自由にご発言をいただけるとありがたいのでございますが、いかがでございましょうか。

じゃあ、白戸委員、お願いします。

○白戸委員 白戸でございます。よろしくお願いします。今、ボランティア、それから指導者様々な意見がございましたけども、僕ちょっとボランティアに関してだけ一つ。

私自身も海外、それから国内、いろんなところで競技をしてきまして、一番感じたことは、海外のボランティアって楽しそうなんです。多分皆さんお分かりだと思いますけど、日本のボランティアって仕事なんです。この差って何だろうと僕はすごく思っています、海外の人はボランティアは何のためにあるのかといったときに、日本の多分ボランティアの定義というのは、何となくそのイベントを支えるため、その競技会を支えるための駒なんです。

でも、海外のボランティアというのは、自分たちが楽しむための時間なんです。この定義、ボランティアの定義というのは、先ほど委員からもありましたけども、ボランティアの定義って何だろうといったときの、そこが根本的に食い違っているのかなという感じがします。

自分たちが楽しいから、当然続くわけです。楽しいから雰囲気も変わるわけです。と

ころが、仕事になるとやっぱり仕事なんですよ。やっぱりこの根本的なボランティアって何のためにやっているんですかというところの定義がやっぱりちょっと難しい、難しいというか違うのかなと。

それを変えていかないと、「支える」って何か、一生懸命自分の身を削って支えていくみたいなイメージがどうしても強い。ボランティアというのは、とにかくオリパラのときではないですけども、何時間以上いて、何をやって、どういうふうなことをして、やらなければいけない、have toになってしまう。have toではなくて、あくまでも自分が自分を高めるためにそういったところに出て行って、触れて、それが結果的に自分に喜びで戻ってくるというのが、それこそが対価だと思いますので。

何かその文化を変えていかないと、あまりボランティアはこうあるもの、こういうふうにしなきゃいけないというふうになればなるほど、ボランティアは多分しんどくなるし、ちょっと指導者とかは別ですけども、ボランティアということに限って言うならば、やっぱりこの辺を日本は変えていかないと、もう少しボランティアを楽しむ、ボランティアで何かベネフィットを得る、自分たち、自分の生きがいとしてのベネフィットを得るみたいなところになっていかないと、ボランティアの広がりというのは、どうしても限界が来てしまうのかなという感じがするので、その辺の考え方、その辺の置き方をやっぱりこれからもう少し我々もみんな考えていくべきではないかなというふうに感じます。

○松尾会長 ありがとうございます。楽しいなと、楽しむんだよということにやっぱり持っていくべきだと非常に皆さんご賛同いただけると思います。具体的に、例えばこんなことをやってみたらどうだというようなことのアイデアはありますか。

○白戸委員 そうですね。ちょっと具体的なアイデアとしてないんですけども、何々をしなきゃいけないというと、すごくそれこそ仕事っぽくなってしまいうんですけども、一番大事なことは、例えば東京マラソンのボランティアで、マラソンを走っている方々が喜んで元気を出してくれたら、実はボランティアもうれしいんですよ。僕もボランティアの指導をする立場もありますけども、そういったときにボランティアが一番うれしいのって、実はお金とか、Tシャツとか、タオルではなくて、選手からありがとうと言ってもらえることがものすごくうれしかったりするところがある、それを感じさせるためにアドバイスはしてあげるけれども、強制をしないということだと思います。

どこかやっぱりこの言い方、先ほど競技団体の使われ方という話もありましたけども、

何かその辺の言い方、アドバイスの仕方によって、ボランティアの気持ちというのは大きく変わってくるし、気持ちで動いていただいている方々ですし、逆にそこが広がっていけば、ボランティアの文化ってスポーツだけじゃなくもっと広がっていくと思いますので、このボランティアの文化というのをやっぱり日本はまず東京からやっぱり変えていくべきかなというふうに思います。

○松尾会長 なるほど。ありがとうございます。私事で恐縮なんですけど、私もアメリカにしばらくいたときに、アリゾナ州というところがありまして、フェニックスという暑いところだったんですけど、マラソン大会があって、そのボランティアをしようということになって、ボランティアで条件があって、特徴のあるチームでやってきてくれというので、じゃあ私どもは寝起きの格好で行こうという話になりまして。初めてでございました、ボランティアを私はパジャマのままボランティアをやったのは初めてでございました。給水のお手伝いだったんですけども、やっぱり褒めなきゃいけない、L o o k s n i c eと言いましたら、Y o u t o oか何か言われて、そういうのが非常に楽しかったなというのは、今お聞きしながら思い出したところでございますし、その大会では、前夜祭でみんな、ボランティアの人も選手もみんなで楽しみながら、そして、選手として次の日に走ったら、走り終わったら、みんなで掃除をされていて、選手とボランティアが行ったり来たり役割を両方やられるみたいな、何かこっちのほうがかだ、やっぱりなというふうに思ったことを思い出したところでございました。

楽しめる、楽しみながらやれるボランティアというものを考えていくべきだというご指摘、ありがとうございました。

ほかはございましょうか。いかがでございましょう。どうぞ。お願いします。

○延興委員 障害者スポーツの文脈だけになってしまいますけれども、「する・みる・支える」という都民のスポーツ参画という視点で見たときの「支える」という意味では、パラスポーツの世界では、この10年に本当に進んだと思っております。先ほどからお話が出ていたいろんなボランティアの登録も私どものほうでやっているS&Sというシステムでも今8,000人ぐらいの登録があって、イベントのボランティアを募集すると、もう倍率がすごく、募集が集まって、当たるのが大変というぐらいなんです。

なので、いつになく、今までになくそういうやりたい熱意は高まっていると思いますし、またチームの応援という意味でもパラスポーツの試合なんかにも10年前は考えられませんでしたけれども、たくさん観客が来てくださるようになって、今の課題としては、

そういうものにボランティアの機会を、あるいは、こういう大会がありますよというのを提供し続けることが今すごく大事になっているのかなと思っています。

ただ一方で、そういう「する・みる・支える」という、都民参画という文脈ではなくて、先ほど塩見委員のほうからお話もありましたけれども、真面目に指導者とか審判とかいって、どう支えるかというところは今かなり厳しい状況がございまして、実際、パラスポーツ指導員の資格を持っている人も足りないですけれども、持っていても活動したことがない人というのが大変多くて、そこをどうしていこうかというのがとても課題になっております。

実際、いろんな大会での審判を集めたり、あるいは、全国障害者スポーツ大会にチームを派遣するときの監督・コーチも実際はもう特別支援学校の先生のほぼボランティアのような献身で成り立っているようなところがありまして、お金だけで解決することではないんですけれども、やっぱりちょっとそういう真面目にと言うとあれですけど、がちっと支える、パラスポーツを支える人の育成・確保をどうしていくかというのは、非常に大きな問題、課題になっていると思ひまして、そこを私どもの協会としても頑張らなきゃいけないんですけれども、是非皆様にもお知恵をいただきながら、せっかくここまで盛り上がってきたパラスポーツを次につなげていきたいなどは常々思っております。

○松尾会長 ありがとうございます。この件については、もっともっとお話を続けていきたいところでございますけど、後ほど総括のところ、今のところにも触れていただいて、ご発言いただければと思いますので、次に行かせていただければというふうに思います。

続きまして、第28期の東京都スポーツ振興審議会の総括につきましてご審議いただければと思います。

第28期の開始から約2年が経過いたしますけれども、今期の審議会は今回が最後となりますので、皆様方から今期の総括をいただければと考えております。

まずは、それでは、事務局のほうからご説明をお願いできればと思います。よろしくお願いします。

○平野計画担当課長 それでは、総括について説明いたします。本件についても要点のみご説明することをあらかじめご了承ください。

今期においては、東京2020大会後のスポーツ振興について幅広くご議論いただきました。各回の主な審議事項は資料に記載のとおりでございます。

本日の論点としては、これら今期における審議会での議論や、今期における事業の進捗・方向性を踏まえながら、今後の都のスポーツ振興をどう進めていくべきか、次期計画の策定も見据え、ご意見をいただければと思います。

ご意見をいただく前に、今期における事業の進捗と方向性について、ここに記載のTOKYOスポーツレガシービジョンの各項目に沿って説明いたします。なお、資料の右側は、レガシービジョンの各項目と現行計画の主な政策指針との対応表になりますので、ご参考にご覧ください。

それでは、「1、都立スポーツ施設の戦略的活用」から説明いたします。まず、上段の「18施設のネットワークでポテンシャルを最大限発揮」では、施設利用に関する総合的窓口となるコンシェルジュの開設や、施設周遊バスツアーなどを新規で実施しております。

下段の「各施設を最大限活用するため多様な活用を推進」では、スポーツでの更なる活用はもちろん、音楽ライブやロケ地利用など、エンターテインメント等で幅広く活用するとともに、周辺施設や地域との連携といった取組を行っております。

今後の方向性として、施設間の連携や各施設の特性を生かした多様な活用の推進により、都民に届ける価値を最大化してまいります。

続いて、「2、国際スポーツ大会の誘致・開催」についてですが、まず、「都立スポーツ施設の戦略的活用」では、18施設のネットワークで大小・多様な種目に対応してまいります。

2段目の「国際スポーツ大会の誘致・開催を促進」では、資料記載の大会の誘致・開催支援を実施したほか、東京のスポーツ資源と都市の魅力をホームページや国際会議等で発信してまいります。

3段目の「スポーツの力に触れる場を広げる」では、各種試合の都民招待のほか、親善試合等により、子供たちの国際交流を促進してまいります。

4段目の「国際スポーツ都市・東京の魅力をPR」では、世界陸上・デフリンピックを通じて、東京の文化や食・観光などの魅力についても世界へ発信する取組を検討してまいります。

今後の方向性として、国際スポーツ大会を開催することで、東京の活性化・都市としてのプレゼンス向上や、ユニバーサルコミュニケーションの促進など、インクルーシブな街・東京の実現につなげてまいります。あわせて、ガイドラインを踏まえたサポート

も行ってまいります。

次に、「3、スポーツの場を東京の至るところに拡大」についてですが、まず、上段の「これまでの取組を発展させ、スポーツの魅力を拡大」では、ウォーキングイベントやラグビーイベントなど、様々なスポーツ体験の機会を提供するとともに、都民からの多様な問い合わせに応えられるよう、情報発信サイトの運営などを実施しております。

中段の「パートナーと協力しオール東京でスポーツを推進」では、区市町村が行うスポーツ実施率やパラスポーツの関心度向上に資する事業に対し、補助を行っております。また、社員のスポーツ活動を推進する取組などを実施している企業を認定する東京都スポーツ推進企業認定制度では、令和4年度に366社を認定しております。

下段の「様々なニーズに応じてスポーツとの新たな接点を創出」では、働き盛り世代に運動機会のきっかけを提供する事業ですとか、GRAND CYCLE TOKYOという自転車を活用したイベントを臨海部や多摩地域で開催してまいります。

今後の方向性としては、区市町村や民間企業等、あらゆる関係者と協力し、日常にスポーツが溶け込んだまちを実現してまいります。

続いて、「4、パラスポーツの振興」についてですが、まず、上段の「ファンの拡大と交流」では、パラリンピックを開催した8月から9月を「TOKYOパラスポーツ月間」と位置付け、集中的にパラスポーツに触れる機会を創出してまいります。また、「TEAM BEYOND」として、ボッチャ大会を中心に障害のある人となない人が交流する機会を提供していきます。

中段の「パラスポーツに取り組む障害のある人を応援」では、スポーツに関心のなかった障害のある方向けに動画を作成するなど、普及啓発を実施するとともに、特別支援学校の体育施設の障害者団体への貸し出しなどを行っております。

下段の「『だれでも、どこでも、いつまでも』を実現」では、遠隔操作による分身ロボットを活用し、重度障害者等にパラスポーツの体験教室に参加する機会などを提供しております。そのほか、今年3月には、東京都パラスポーツトレーニングセンターを開設しております。

今後の方向性として、障害者が自らの状況に応じてスポーツを楽しめるよう、人材育成や場の確保などに取り組むとともに、都民が身近な場所でパラスポーツに親しめるきっかけを提供し、誰もがスポーツを楽しめる共生社会の実現につなげてまいります。

続けて「5、東京のアスリートの活躍」についてですが、まず、上段の「競技人口の

拡大、アスリートの発掘・育成」では、地域のジュニア層を対象としたスポーツ教室等へ助成を実施しているほか、パラスポーツ次世代ホープ発掘事業では、対象にデフスポーツを追加するなどしております。

中段の「東京のアスリートの強化」では、選手や指導者の競技活動費の助成などを実施しております。

下段の「アスリートがその経験をもとに地域で活躍」では、国際大会での活躍が期待されるアスリートなどについて、特設ホームページを作成するなど、広報・応援を実施しているほか、東京ゆかりのパラアスリートについては、学校や区市町村などからの依頼を受け、講演会等の講師としてマッチングを実施しております。

今後の方向性として、アスリートの発掘・育成・強化を一層後押しするとともに、アスリートがその成果を地域に還元する取組を促していくことで、更なるスポーツの裾野拡大につなげるなど、好循環を生み出してまいります。

次に、「6、ボランティア文化の定着」についてですが、まず上段の「多彩な情報・活動フィールドの提供」などでは、東京2020大会のシティキャスト・フィールドキャストに「東京ボランティアレガシーネットワーク」や「TOKYO障スポ&サポート」への登録を案内し、スポーツイベントでの活動機会を提供しております。

下段の「大会で得られた経験・ノウハウの発信」では、シティキャストの募集・運営システム構築を通じて得たノウハウを手引きとしてまとめ、公表するなどの取組をしております。

今後の方向性として、東京2020大会を契機に高まったボランティア活動への気運を更に高めるべく、活動機会を拡大し、ボランティア文化の定着を図ってまいります。

最後に「7、未来へのメッセージ」についてですが、まず上段の「大会の記憶に触れる場や機会を創出し、大会の感動と意義を後世に継承」では、各種レガシー設置物の設置や、アーカイブ資産の展示・公開を実施しており、来週8月30日はSusHi Tech Square内にデジタル技術を用いた資産展示や競技体験ができる場を開設予定でございます。

また、中段に記載しておりますとおり、パラリンピックのマラソンコースを活用した東京レガシーハーフマラソンを昨年度、創設しております。

下段の、「大会で得た知識や知見の共有」では、パリ市、ロサンゼルス市と大会運営の知見等、情報共有を行っております。

今後の方向性として、東京2020大会が残した様々な資産に触れることができる場を身近な場所に創出することで、大会開催の意義など、重要なメッセージを未来に受け継いでまいります。

以上、駆け足でのご説明となりましたが、東京2020大会後の2年間で様々な事業を展開してまいりました。これらを踏まえながら、次期計画を見据え、ご意見を頂戴できればと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

○松尾会長 ありがとうございます。非常に短い時間ながら、適切におまとめいただきまして、ありがとうございます。

それでは、ここからはこの総括といたしまして、今、いろんな角度からのお話があったわけですが、それぞれの委員のお立場では、様々な見地からご示唆をいただければありがたいというふうに思います。これにつきましては、各委員の皆様、全員にお話をいただければありがたいというふうに思います。

ただ、時間的なところもありますので、できましたら3分から4分ぐらいのところでお話をいただけると、大変ありがたいというふうに思います。

順番でございすけれども、宮地委員のほうからはじめまして、そして今度は慶野委員のところいきまして、そして最後ということできたいと思いますので、そんな形でよろしゅうございましょうか。

それでは、宮地委員のほうからお願いします。ありがとうございます。

○宮地委員 早稲田大学の宮地でございます。

第1回から第4回ということで、レガシー、それから施設、する・みるスポーツ、支えるスポーツということできたわけですが、その観点に沿って、少し私の総括のコメントをさせていただければと思います。

まず、東京オリパラのレガシー、どう活用していくのか。施設を活用していくのかという点ですが、国際的に見ても、この東京オリパラの施設というのが、もう世界でもトップレベルの水準があると私は思います。すばらしい施設です。多分、恐らく今日もボートの会場になった海の森公園ではインカレをやっているんじゃないかと、カヌーか何かのですね。

先々週は関東委員会があったりとかということで、私もその会場で競技を見てきたんですけれども、すばらしい施設ですね。でも、バスとか交通機関がちょっと不十分で、車で行かせていただきましたけれども、せっかくああいう施設があるんだけど都民の

方はあまりよくご存じないんじゃないかなと思います。

ですから、一人でも多くの方に、このすばらしいハードを活用していただけるような取組をこれから続けてもらって、もっとアピール、国際的にもアピールしていただけたらいいんじゃないかなというふうに思いました。また、レガシーのソフト面ということで冒頭にありました、東京都の関与のガイドラインといったソフト面でのイベントなど、スポーツ振興していくための東京都の関わり方についてのガイドラインであったりとか、ガバナンスの取り方、こういったことが非常に進んできたことというのは極めて重要なレガシーで、ますます発展させていけるといいなというふうに考えているところです。

それから、みるスポーツについてですけれども、ここオリパラ以降ですね、東京に限らず日本全体におけるみるスポーツの進化というのが進んでいると。見ている人の数はそんなに増えていないかもしれませんが、見ている人は、その見ることに對する価値の意義づけとか、払うお金の額とか、そういったものがペーパービューでもテレビで見るよとかですね、あるいは会場で高いお金を払っても見るよという、もっと専門的な視点で見るよといった、その見る人の文化がとても高まっているなというふうに思っています。

これは、数を増やすことも大事ですけども、見る人も得る喜びが深まっていくという質の向上というのが、非常に意味のあることだと思いますし、最近の研究では、前回の会議でも言いましたが、みるスポーツの健康増進の価値みたいなものも分かってきていますから、みるスポーツ、ますます普及啓発していけるといいなと思いました。

先ほど、多くの委員からも支えるスポーツについてコメントがあったので、一つだけ申し上げたいと思うんですけども、支えるスポーツは、ボランティアの方であったりとか、楽しんで参加していただく方の力がとても必要だし、それに関わる人の割合を増やそうという目標は、とてもいい目標だと思うんですけども、実は運営する方々のプロフェッショナルとしての技能が支えるスポーツを担っていただける方の喜びにどれだけつながるかに、直結しているということなんですよ。そのプロフェッショナリズムを高めていくという努力は少しまだ私は不十分なんじゃないかなと思います。これは日本全体において。

なので、早稲田大学では支えるスポーツをできる、支えるスポーツをマネジメントできる人材をこれから養成していこうということで、力を入れていこうと思っております。教育機関としても、そういうお手伝いをしていきたいと思っておりますので、是非東京

都としても、支えるスポーツを推進していこうというお立場であれば、そのプロフェッショナルリズムを高めていただけるのかというのを研修会であったりとか、こういったガイドラインなどをうまくつくっていただいて、より高めていただければと思った次第です。以上、よろしくお願いいたします。ありがとうございました。

○松尾会長　ありがとうございました。施設の問題、それからみるスポーツ、それから支えるスポーツの問題、そこにおけるプロフェッショナルリズムというキーワードも一つまた新たにいただいたところでございました。ありがとうございます。

先ほど原委員のほうに、何番目に触れていただくかと言っていなかったのですが、すみません。塩見委員までいきましたら、原委員のほうに行きまして、そして延興委員、こういう順番ですので、少しお待ちいただければと思います。すみません、ありがとうございます。

それでは、続きまして水村委員のほうからお願いします。

○水村委員　お茶の水女子大学の水村でございます。私は、委員の中では立場的に女性ですとか、あるいは子供を育てる女性、あるいは子供たちにとすることで意見を発信させていただくことが多かったのですが、若干それにも触れながら振り返りたいと思います。

もともとスポーツ参加者を増やすという文脈を考えたときに、これは多分、何度もこの会議でも出ている話題だと思いますけれども、どうしてもスポーツのイベントやいろんなスポーツの取組に工夫をすると、スポーツに興味のある人がさらに参加するということが、全くスポーツに興味がない人が新たに来るということが非常に難しいというのはよく話題になっていたと思います。

例えばですけれども、私、都内の小さな女子大の教員を長くしておりまして、うちの大学なんかは、ほとんどスポーツに興味がないような女子大生ばかりで、実はちょうど去年の秋、後期の授業が始まったときに、生理学の授業だったと思うんですが、オリンピックの試合をテレビでもいいから見た人というふうに聞いたら、誰一人見ていなかったということで、一応うちの大学は体育の教職も出しているのに、何と由々しきというか、あとは私の、もっとちょっと前期にいろいろ発信すればよかったなと思ったんですけど、何もしなくても、多分これだけオリンピックで盛り上がっていたらきっと見るだろうというふうに思っていたら、どうも女子大生はそうじゃなかったということで。

やはりそういう、放っておいたら全くスポーツと関わらない人たちが、どうスポーツと関わっていくかということを考えなきゃいけないというのを非常に身近なところで感

じた次第です。

やはり、せっかくこのスポーツに関する事業を生活文化スポーツという局がやっていらっしゃるというところが、やっぱり一つのキーかなと思いまして、スポーツを、要するに我々の生活文化の一つとして捉えて、先ほどボランティアのハードルを下げるという話題も出ましたけれども、もうスポーツ自体のハードルを下げてしまうということが一つかなというふうに思っています。

先ほど、やはり海外だとボランティアが楽しそうという話題もありましたけど、やはりスポーツも興味のない人たちにとって、どう楽しそうに見えるかというところは非常に重要なかなというあたりで、例えばですけども、ボランティアという名前になるとちょっとハードルが高いかもしれませんが、今、女子大生を日々目の前にしていますと、推し活というのがすごくはやっておりまして。

私も昭和、平成、令和と生き抜いてきて、令和で生きているのに推し活をしていないと、この時代を生きたということにならないんじゃないかと思って、よくうちの大学の学生と、世の中にはどういう推しがいるんだという話を雑談でするんですけども、例えば、スポーツを推すということ、あるいは、それこそデフリンピック推しとかですね、何かそういう違う言葉を使えば、急に興味を持つ人たちっていうのも出てくるかなというところがあるかなと思ったり。

あとは例えば、海外から日本を見ますと、いわゆるクールジャパンの文化といいますか、アニメとか、そういう海外の人たちが日本の文化というと、これと思うようなところをうまく利用するですとか、あるいは私も海外、大分前ですけど、ケルンに学会で行ったときに、ケルンのサッカークラブをみんなで見に行こうと行って見に行ったときに、そのサッカークラブにいらっしゃる人、私がイメージするのはファンがいっぱい、そのサッカークラブにいるということをイメージしていたら、全然若い人たちはいなくて、地域のおじいさん、おばあさんたちが何かひたすらビールを飲んで雑談をしているんですね。すごく緩い感じというか、先ほど会長もパジャマでご覧になると話ありましたが、こういうふうにしてスポーツを支える環境があるから、こんなにサッカーが盛り上がっているんだなというのを、そのとき感じました。

私は研究上は、どちらかというとスポーツよりダンスという芸術文化系のことをやっていますと、例えば、スポーツよりさらに、それこそ私が長くやっていたのはクラシックバレエですので、クラシックバレエの劇場に人に来てもらうというのは非常にハード

ルが高くて、それこそ海外なんかはそれに対していろんなことをやっていますが、その取組の一つにリラックスバレエといいまして、劇場なんですけど、公演をするときに普通は観客席を暗くして、舞台だけに照明を当てるんですけど、一切そういうことをしないで、明るい劇場のまま子供が立ち歩いたりしても誰も怒らない。けども、舞台では白鳥の湖をやるというのをリラックスバレエというふうに呼んで、結構イギリスのバレエ団なんか、そういうことをやって。

要するに誰が来ても、出ていってもいいし、要するに普通の劇場だったら休憩時間にならないと立ってはいけないし出てはいけないというルールがあるけど、そのルールを全部取っ払って、出ていってもいいし、見たい人は見てというような取組をされているという話を聞くと、何かちょっとリラックスしてスポーツというのも、もしかするとハードルが下がる一つなのかなというふうに思います。

あとは今日、実はちょうど都庁に入ってくるときに、イベントの横にキッチンカーがあったりとか、例えば、スポーツのスタジアムに行くとか、会場に行くのではなくて、あそこに美味しいキッチンカーが来ているとか、あるいはどここのスタジアムのジェラートは美味しいとかですね、多分そういうふうに仕掛ければ、うちの女子大生ももしかしたらオリンピックのどこの会場の何が美味しいとかいうと、行ったりとかですね。でも、それをきっかけに行ったことによって、たまたまやっていたスポーツを見たら結構面白かったという、何のきっかけでもいいと思うんですけども、そういうきっかけでスポーツに興味を持って、やってみようかなということが都民の健康増進につながっていくというような、ちょっと違う入り口とか、違うやり方ということがこれから必要なのではないかなというふうに思いました。

1点ですね、先ほどちょっとオリンピックを見た女子大生が少なかったのも残念だったんですが、本年度パラダンススポーツのイベントがあったというのを私自身、ここの委員をしておりますながら存じ上げませんで、ダンスの研究をしていて、ダンスに結構ネットワークがあったので、それこそ小中高の子供たちに、パラダンススポーツ、後からイベントを拝見したら無料で見れたようですので、例えば、自分がやっているダンスが、その障害者の方たちもやっていて同じように楽しんでいるということ子供たちに、ちょっと発信できなかったのが残念だなと思いましたので、私自身ももっといろんなところにアンテナを張って、これからも子供や、あるいは子供を育てる女性、あるいは今何もスポーツに関心がない方たちに向かって、どういう発信ができるかということを考え

ていきたいなというふうに、この機会を通して感じました。

すみません、長くなって失礼しました。

○松尾会長 なるほど。ありがとうございました。これから流行るデフ推しというのを皆さんと考えながら、要するに言葉を変えたり、あまり固く捉えないで、やわらかく物事を捉えることで無関心の方に関心を持ってもらうということは大変大きいですね。

本当に勉強になりました。ありがとうございます。

それでは、藤田委員のほうからお願いできますか。

○藤田委員 私、これで8年目で任期満了で、今日が最後というふうになりますが、お世話になりました。ありがとうございました。遺言を残していきたいなと思います。

まず、障害者スポーツに関しては、部局の方、本当に丁寧にいろんなことをやられて、少しずつ進んでいって、本当に頭が下がる思いです。それを分かった上でさらにということ、お話しさせていただきたいと思います。

まず、これは障害者スポーツに限ったことではないんですけども、どういう社会、どういうスポーツの世界にしたいのかという、そういう具体的な姿を描き切れているかどうかという、描き切らないと、やっぱりよくないと思うんですね。例えば、デフリンピックをやったからといって共生社会が実現されるわけではないのですね。

デフリンピックでいうと、デフリンピックの場合は審判とか、そういった人たちも大体皆さん聴覚障害の方でやるということが一応、そういうふうな形になっていますので、そうすると障害のない方と分離してしまう可能性があります。

でも、障害のある人となない人が交流ということを考えるのであれば、どんなことをしなきゃいけないのかという、デフリンピックを開催すればいいのではなくて、それを通じて、一つ、二つ手話を覚えて、何かやりましょうとか、そういったことを推していかないと、実際の交流というのはできないと思うんですね。

そういう、どういう形、どういう社会にしたいかという姿を具体的に描いて。この中にボッチャ、障害のある人となない人の交流というのも入っていましたが、これもよくよく見てみると、障害のある人となない人が交流するというイベントの多くは、障害のある人にはボランティアがついて、ボランティアと交流している。実は、別の障害のない人とは交流していないということはよくあるのですね。そういうことがほとんどなんです。ボランティアの人と交流できて、障害のある人と障害のある人が交流できたねというふうになることが多いんです。でも、そういう社会をつくろうとしているわけでは

ないと思うんです。

であれば、どういうふうなことを仕掛けていかなきゃいけないのかというのが出てくるんじゃないかと思いますので、障害者スポーツのことに限らず、いろんな、こうあるべきだ、こうしたいという姿を具体的にやっぱり描いて、そこに近づけていくということが必要なと思います。

もう一つは、障害者スポーツのことなんだけれども、七つ柱が出てきていますが、それをやっぱり機能的に連携させていくということが必要なというふうに思います。

多分これをやるときに、生活文化スポーツ局の中でどういうふうな分掌でやっているか分かりませんが、例えば、地域でスポーツとか、あるいは健康の増進といったときには、高齢者の方が対象なんだけれども、そこに障害の人が入ってきてもいいわけで、そういう連携してやればうまくいくし、無駄が省けるし、非常に効率よくやれることがあると思うんですけれども、それができるかどうかですね。

それには多分、その部局の中の連携というのが非常に重要になってくると思うんですけれども、そこを是非、できているかできないかと分かりませんが、今以上に進めていただけるといいかなというふうに思います。なので、「この課題についてはここでやる」というのではなくて、お互いにやっぱり連携しながらやれるところ、一緒にやれるといいんじゃないかなというふうに思います。

最後は、無関心層をつくらないということが障害者スポーツに関しては重要なと思います。これは、でも障害者スポーツに限らず、スポーツ全般にも同じことが言えると思うんですが、今実は私、障害のある選手のインタビュー調査、今年でもう70人ぐらいやっているんです。分かったことが一つあって、障害があってもスポーツをやっているという人は、スポーツに関心がある人なんですよ。間違いなく。やっていない人はスポーツの調査を見ても、自分ができると思わないとか、全然関心がないという人が多いんですね。その関心がない人を、たくさんこれまでつくってきたということです。

それは、障害がなくても同じかと思うんですけれども、その関心がない人をつくらないために、じゃあ何をすればいいかというと、例えば、学校体育の中であれば、障害のある人も入って、一緒にインクルーシブな体育がちゃんとできているかどうか、見学とか、それから点つけで終わっていないかというようなところを見ていく必要があると思いますし、そうするとスポーツに関心がないという人がだんだん少なくなってくると思うんです。

今、スポーツに関心のある人をパイにして、そこからどんな系の人にスポーツ参加してもらおうかというような状況なので、そうではなくて、とにかくスポーツに関心がないというような人をつくらない。それは障害のない人のスポーツであれば、それこそコーチングの仕方であるとか、体罰のあるなしであるとか、そういったところに出てくると思うんです。

障害のある人の場合は特に、その部分で、小中高で体育、十分参加できなかったという人の一番多い理由としては、難しくて参加できなかった。ということは、それはちゃんとできるようにしてあげれば、参加できたはずなんです。

それから、ほかの人に迷惑がかかるからやらなかったという人も多いです。それから、これは障害のある子供も先生も、共同作業じゃないとできないんですけれども、というか、もう一つは特に参加を求められなかったという人が結構いるんですね。

ということは、先生もやり方分からないから、ちょっと置いておこうと。生徒のほうも、どうしていいか自分にはできそうにないから何も言わず、それでずっといつてしまうということなんですね。そういうことが起こらないように、無関心層をつくらないためにはどうすればいいのか。

私はいつも、本当学校の体育の先生が障害者スポーツのことを分かっている、あと後天的に障害を持った人であれば、PTさん、OTさんが障害者スポーツの情報とか、ここいけばいいよというのを教えてくれれば、発掘事業なんかやらなくたっていいんです。もう、それで皆さんやってくれるので。という、どうすれば無関心層をつくらないでいけるかということを、是非今後考えていただきたいなというふうに思います。

以上です。

○松尾会長 ありがとうございます。非常に重い内容だったかと思います。特に、これからの世界、スポーツ界、スポーツをめぐる生活、文化というのをどういうふうに私どもイメージできるのか、次の計画がもう目の前に来ておりますけども、そういうことをしっかり考えようというようなご指摘だったというふうに思いますし、水村委員と同じように無関心をつくらない、あるいは無関心から関心をどう持ってもらおうかというところを、もっと提示をすべきではないかというご示唆だったというふうに思いますね。非常に重いご示唆です。ありがとうございます。

それでは、続きまして上代委員のほうからお願いします。

○上代委員 上代です。私のほうからも同じようなお話になってしまうかもしれないんで

すけれども、まずキーワードとしては発想の転換なのかなと思っておりまして、まずここにいらっしゃる方々もスポーツに興味ある方だと思うんですけど、まず世の中スポーツ好きだけではないよというのを前提に話していかないと、まず進まないんだろうなと。

したがって、もう一個発想の転換なんですけど、もうスポーツ施設、こちらにもありますけれども、スポーツ施設はもうスポーツをする場所ではないとまで言い切ってしまうと、スポーツ「も」できる場所であるというような発想の転換にしていかないと、ちょっと難しいのではないのかなと思っております。

スポーツ施設、スポーツする場所ではないということで、例えば、何か災害があったときにそこは避難場所になるわけで、そこにはいろんな方が避難して来る、そこには例えば、障害者の方も避難して来るわけで、そこで、そのスポーツ施設にDXがうまく導入されていれば、例えば、聴覚障害の方、目で見えるということで余計逃げやすいとか、何かしやすい。実はそれってスポーツビジネスの分野からは、ふだんは広告にうまく利用できたりとか、イベントにうまく利用できたりができるわけですね。

なので、そういうようなものに、それがスポーツ施設ではないよということで新たに何か、じゃあ避難場所だよねということで導入したものがスポーツには使えるというようなことであったり、あと先ほど、このお話でも出てきましたけど、楽しいって結構キーワードになってくるとかって思っておりまして、ただ単にスポーツをするから楽しい場所ではなくて、その場所自体が楽しい場所なんだよ、行きたい場所なんだよというふうに変えていく、スポーツができるから楽しい場所なんだよというアピールは、もう変えたほうがいいんじゃないかなと。

例えば、子供たち、放課後、お家にいるより涼しいよとか、誰かいるよ。そうしたら、お父さん、お母さんも外で仕事するのに、誰かいるから安心して預けられる場所になるんだよ。単なる子供の居場所でもいいと思うんですよね。

あと高齢者の方も、お話したいから病院に行くのではなくて、お話したいんだったらスポーツ施設の中の、先ほどほかの先生からも出ましたが、そこに行けば誰かと話せるよ。別にスポーツの話をする必要はないんだよということで、もしかしたら障害者の方々もスポーツ施設って結構バリアフリーとか進んでいたりしますよね。そういう方々の居場所にもうまくすればできるのかもしれない。で、先ほどのお話にもなりますけれども、それがスポーツを始めるきっかけに、うまくこっちも利用してあげればいいのかなど。

それが、例えば、スポーツを始める機会の創出という3番にもつながってくるかもしれませんが、パラスポーツの振興という4番にもつながっていくということで、そこがまたそのまちづくりにもなってきますけど、スポーツ施設といわれている場所を楽しい場所であり、したがってまちづくりの核とか、コミュニティづくりの核というほうに持っていく、そうするともしかしたら、お金引き出すのも、スポーツ関係の部署からだけではなくて、ほかの部局さんからもお金引き出してくること、できるかもしれないんですよ。そうすると、よりいいものでできていくかもしれませんよねというのが、ちょっと思ったことです。

少しずれてしまうんですけど、その発想の転換というところから、例えば、私専門ではない中で少し思ったのが、障害者の方々って、支えられる方々がもしかしたら多いのかもしれないんですけども、実は彼らってスポーツの世界で支える側にもうまく発想の転換、提供してあげればできるんじゃないかと私は思っていて、例えば、スポーツアナリスト、非常に今のスポーツ競技においても重要になってくるポジションなんですけど、別にそのポジションの人たちって、走れること、歩けること、全く求められていないんですよ。

だけど彼らって、それを知らないがために、自分はスポーツをするのであれば、さっきの先生のお話じゃないですけど、誰か助けてもらわなければならないからやらないではなくて、実は支える側になれるんだよというようなことを教えて、話して差し上げさえすれば、それがスポーツを、自分もスポーツに関われるじゃんといううなきっかけにもなってくる。

すみません、少し長くなってしまったんですけども、要は今ある発想というものをどんどん転換していく、そのことで広がっていく部分というのは大きいんじゃないのかなという、この28期を通して考えた私の想いです、以上です。長くなりました、失礼いたしました。

○松尾会長 いえいえ、とてもご示唆に富んだお話ありがとうございました。特にスポーツ施設は生活文化の拠点であるという広げ方、考え方をもう少し柔軟に考えてみたら、様々なことが考えられるんじゃないか。

それこそ、先ほどの無関心の方も関心を持ってもらえるような機会、チャンスというものは大いに出てくる可能性も高いんじゃないかというご示唆は非常に、これからの施設の運用、運営という意味でも重要なご示唆をいただきました。ありがとうございます。

それでは、大日方委員お願いいたします。

○大日方委員　ありがとうございます。私も気がつけば8年を迎えておりまして、この8年間でどれだけ大きくスポーツが変わる、とりわけパラスポーツという側面において大きく変わったかということも振り返りつつ、次へつながるご提案ができればなというふうに思っております。

キーワードは、シームレスとフラットということかなというふうに考えます。シームレスというのは、一つはスポーツの中のパラスポーツ、たしか8年前にここに来たときに、その議論をさせていただいたと思うんですけれども、スポーツと、当時障害者スポーツというふうに言っていましたけれども、全く別のもののよう議論していくことが本当にいいことなのかと。

ただ、当時障害者スポーツが本当にまだまだ整備されていなかったのも、ここで取り上げて、取り出して議論をすることで最終的にはスポーツと言えみんながするスポーツなので、特に何々スポーツと言わなくとも、それはみんなのものだよねという、この社会を目指しましょうねという話をしたかと思います。

この8年間で、恐らくそういったことがもう大分進んできたという意味でいうと、もっとパラスポーツというものがより一層、融合していくものというか、もう既に融合しているんですけれども、いろんな人を内包しているからこそ、スポーツの価値なんだというところですね。誰も取り残さない。そして、それがシームレスにつながり合っているものなんだということを次に向けて改めて発信して、我々が目指したいこと、スポーツを通じて、その社会に伝えていきたいことはここなんだということをもう一度発信をしていただくことがいいのかなというふうに思いました。

それと、もう一つのキーワードのフラットなんですけれども、先ほどの方もいろんな方々がお話しされていましたが、ボランティアの人が使う、使われるという競技団体との関係性みたいな、上下関係みたいなものというのは、もうこれはつきり言って古いですよ。スポーツを楽しむものにおいて、する人もみる人も支える人も、フラットなんです。ちょっと前までアスリートセンタードという言葉があったり、アスリートファーストという言葉があったり、そういうものが勘違いを増長させるじゃないですけど、何かをする、人を支えると、何か上下つけてしまう。そうではなくて、支えられる人は、支える人から、する人はまさに応援してくれる人から力をもらえる。力がもらえているというのはイーブンか、それ以上の関係なわけで、ここに上下という関係を徹

底的に排除してしまおうという、そういうことを力強く伝えることがいいのかなというふうに思います。

それから、する、みる、支えるということも、する人がみる人にもなり、みる人も支える人にもなり、支える人も、ここも分けて隙間なくやってしまえばいいんじゃないかなと思います。

先日、有明アリーナでディズニーオンアイスを見に行っただけですけども、これはみる人だったんですが、見に行っただけで、そこで何か隣でやっていたカヤックの体験みたいなものを、ちょっと何の予約もなくさっとできて、それが実は車椅子でも、足でこぐものが多いらしいんですけど、手でもこげる、そんなものもやっていて、初心者でも、小学生とかでも乗れますよということだったので、ちょっと乗ってみたら、これが湾岸からの景色がすごくきれいなんですよ。東京湾ってこんなふうに見えるんだ水辺からもというのを楽しむ、何となくアクティビティも、見に行っただけですけども、するも楽しめたし、ああこういうことかという、何か全部が楽しめる、スポーツシーンが広がるなというような、そんなすてきな体験というのがどんどん増えていけばいいなという意味でもシームレスというところを付け加えたいと思います。

これらを実現する、こういったものを実現するのは、実は先ほど宮地さんがおっしゃった、プロフェッショナルなスポーツマネジメントの人材なんじゃないかなというふうに思うんですね。

スポーツの喜びとか楽しみとかって自発的なものといわれていて、それを最も知っていて、じゃあどうすれば提供できるかを知っているのがプロフェッショナルだと思いますね。そういう人たちが支える人材としてしっかり育っていくということが必要なんじゃないかなというふうに思っていて、私がイメージするプロフェッショナルというのは、互いに尊敬し合うとか、尊重し合うということ、認め合うということを自分の言葉で表現したり、コミュニケーションをして、促していく、いろんな方々を融合させること、それから関心を引き出すこと、つなげていくこと、そういうことを通じてできる、提供できる、そういう方々じゃないかな、であってほしいなというふうに思いますし、施設の利用のハードルもどんどん下げたり、これまでにない形を柔軟に持ち込んで、じゃあどうすればできるか。

例えば、障害のある人が来たときに、できないと、ルールでシャットアウトするのではなく、じゃあこういうふうと一緒に参加しませんかというようなことが提案できる、

そんな人材であってほしいなというふうに思いました。とにかくスポーツって、以前の形だと禁止とか強制とか、押しつけみたいなものというのがまだまだイメージの中に残念ながら、特にスポーツに近づかない人たちにこそ、そのイメージがあると思うんですね。

なので、それを一生懸命変えていく、スポーツからそうではない、フラットなんだよということを伝えていくというのは、私たちスポーツを楽しむ人、スポーツのすばらしさを知っている人間だからこそどんどん発信していくということが、これから次のまたスポーツの価値を皆さんにお伝えできる、そんな基盤になってくるんじゃないかなというふうに思っています。ありがとうございました。

○松尾会長 ありがとうございました。もっとずっと聞いていたいというようなお話でございましたけれども、基本的にコンセプトとしてシームレスという問題、それは種目間だけではなくて、それをみんな支えるという意味でのシームレスという問題もあるだろうという。

それから、フラットという、ただフラットになればいいわけじゃなくて、そのベースにあるのがリスペクトであるという、このあたりの構図がしっかりできてくると、次の計画なんかも非常によくなるんじゃないかと。ただし、ベースには今までアマチュアリズムという言葉を一時期使っていましたが、今使いませんが、もっと金銭の授受、そういうものではないプロフェッショナリズムを行政の中でも、あるいは日常の中でも必要なスポーツ界の中でというんですかね、必要なものとしてのプロフェッショナリズムという重要なキーワードをいただきました。

本当にありがとうございました。

それでは、慶野委員のほうからお願いできますか。

○慶野委員 慶野でございます。まず少し、今日の議題になっていた、支えるのほうのコメントですが、先ほど上代先生もおっしゃっていましたが、支える定義、またそのハードルを下げていく、こうした観点で、この場での各先生方の専門的なお話、本当に私は専門的な知見を持ち合わせていないものですから、勉強させていただいておりますけれども、一方で我々は日頃から地域で、地域住民の声をいかに拾い上げていくか。また声にならないような声を、どう汲み取っていくかというのを私たち、ライフワークにしているわけですが。

その一つの象徴が、先ほどもお話出ていました、甲子園の大会で選手宣誓を私、近年注目しております。様々な困難な状況で全国的な災害、まちごと流されたり、少し前に

は、固有名詞は出しませんが、お父様が災害で流されて、今プロ野球で一生懸命活躍している等々、まちごと失っていくような、そうした中で選手宣誓を聞いていると、その高校生が、または競技者が世間との関わり合いをどう持っているかというのが一つ、私の地元で聞くお話よりも象徴的に感じ取れる場面なんですね。

今年は高知中央高校の主将が、困難な状況下で夢を追い続ける勇気をもらっているんだという、こういうお話をされていましたが、昨今のお話、総合的に見ると災害、コロナ禍、中止にもなった、だけど、このグラウンドに立たせてもらっている感謝をしたいんだと、こんなお話が例年続いております。

これは支えているという側もそうですけども、支えられている側に、こういうマインドのチェンジが行われているんだなと。これも新聞報道で見ましたが、一昔前は帽子のつばの裏に一球入魂とマジックで書いてあったり、根性とか忍耐とか、こういうふうに精神論で書かれていたんですけれども、昨今のブームでは多くの甲子園出場選手の帽子の裏には、絆、感謝、こうしたことが書き込まれているそうです。

つまりスポーツ選手として、競技者として行っている人たちは、支えてくれている側が、どういうつもりであろうと、支えてくれているんだという感謝を常に持っている。コロナ禍だった、災害で家族を失った、学校そのものも水没した、こうした生徒たちが今野球をできていることに感謝する、支えてきてくれた多くの名もない地域住民というんでしょうか、そういう人たちに今、感謝を感じているスポーツ選手、競技者というのは、そういう状況になっているんだろうなと思います。

聞けば支えているというのは14.9%になっているそうですけども、これはまさに上代先生おっしゃっていたように、直接的な関与をしていないから支えているという自覚はないですけども、昨日優勝した高校の地元では、まち中大喜びですし、生徒が、その選手が日頃、立ち寄っている定食屋さんの、そのお客さんまでもが大騒ぎして、彼らもまた支えている一人であるでしょうし、支えるの定義を、こうした審議会でも直接的関与を持って支えるというのか、まちを挙げて、一人一人が支えてくれている、その当事者であるというふうに解釈するのか。

この解釈そのものを細分化しないと、議論は本来であれば14.9%どころか東北の水害、災害のあったある地方では、それこそ、そのチームを支えた人は、もう90%、100%なんじゃないかというふうにも、この数字の精度そのものも大きく変わってくるんじゃないかと思います。

あと先ほど、この話はこのぐらいですけども、同じ野球でいうと、地域を代表する、その人たちの活躍がどれほど楽しいかという、うれしいかということの大きなお話が。もう大分前になりましたけどもWBCで、例えば、我が国を代表するあの選手たちが、大谷翔平選手のような方がバーッと活躍すると、ふだん野球なんか興味ないし、ルールも知らないような年配のご婦人方が、みんな大谷君ファンになって、テレビの前にかじりついている。こうした状況、これは地域でもいろいろお話を伺いましたけども、やっぱり我が国、我が地域を代表する人の活躍、それが集約されているのが一つ、代表的なスポーツでいうと高校野球であったり、サッカーであったりと、こういうものに象徴されているんだなというふうに感じました。

全体を通してのお話、結論になりますけども、先ほど原先生がおっしゃっていたかと思うんですけども、ある程度、成熟を見た競技団体というのは、それなりの規模があって、上下関係があって、権威権力が伴っているがために、携わりにくい。昨今ニュースになっているパワハラ等々含めて、一つ一つ団体名を申し上げるつもりありませんけども、そういう状況があると思います。

その一方で、2016年から2020年ぐらいの5年間で、競技人口が5.2倍にまで膨れたスポーツが一つあるんですね。これはパワーリフティング。実は私もかじっているんですけども、パワーリフティングにはいわゆる組合はありますけども、伝統的、歴史的なカリスマ指導者がいるわけでもなく、相手はその指導者からの上下関係、丸坊主を強いられるとか、どういうスタイルで行わなきゃいけないというものは一切ありません。自分と重力との戦いみたいなものですから、この困難な時代の中で、ほかのスポーツでは数%の増減があったりしても、5.2倍にも競技人口が増えるということは、まず今あり得ないと思うんですね。

こうしたことを考えると、大きな団体に属する、またそこを支える側になるということの障壁を、私はパワーリフティングを通して感じるんですが、自分と、その競技に真正面から向き合えると競技人口というのは5倍にも膨れ上がる。これを、実は私感じたのは、高校生の息子2人いるんですけども、この2人が今、一生懸命体を鍛えていて、そのお付き合いでやっていて自分のほうがハマってしまっているんですけど。

今、その指導者が必要のない、ある程度のきれいなフォームとかは重要なんだと思いますけども、息子たちはY o u T u b eでボディビルとか、パワーリフティング、ウェイトリフティング、そして今一番はやっているのはフィジークですね。美しくかっこい

い体をつくっていく、こうしたものは自分で選べる。

野球もサッカーもそうです。カリスマの先生がいるところに進学するというよりは、この甲子園でも話題になりました主体性、自主性を重んじて、自分でチャレンジしながら自分の形で競技力を向上させていく。

このY o u T u b eで毎日毎日語りながら、これが8月の上旬にビッグサイトでS P O R T E Cという世界中のスポーツ関連企業が、それこそスポーツジムのロッカーから、入退場のオートロックを製造する企業から、食べ物、栄養食品、こういうところまで含めて全てスポーツに関わる企業が集まったイベントに、これもプロレスラーとか、K-1の選手とか、レスリングの選手とか、いっぱい人が普通に歩いているわけですけども、もう人だかりがひときわできているのがフィジーク。今、Y o u T u b eで話題の人たちのところにうちの息子もわーっとかけていって、ファッションショーのような、ファッションショーといっても裸なわけですけど、それをみんな見て、本当に大盛り上がりをしていて、こういう時代なんだと。

型に押しつけて、物すごいハイキャリアな指導者からの指導を受けるよりも、自分で憧れの人を見つけて、その体を目指してつくり上げていく、このS P O R T E Cの大会がまさにスポーツ人口の増進を目指すとともに、スポーツと健康、スポーツと美容、スポーツと地域創生、こういうのをうたって開催されておりました。

私も含めて、育ててくれた人がいる、携わってくれた人がいる、地域で陰に陽に、いろんな形で支えてくれた方々に感謝の思いを持ち続ける、こうした形でスポーツの裾野拡大をしていかなければいけないんだと、全く抽象的なお話ししかできなくて申し訳ありません。今期も皆様に大変にお世話になりました。ありがとうございました。

○松尾会長 どうもありがとうございました。もしかすると今、スポーツに携わる、関わる人たちのマインドセットというか、考え方がどうも変わっているかもしれないという、これ非常に重要なご示唆でございまして。

そこに感謝とか、そういう新しい動きを読み解き、新しく提案していくということもこれから求められるんじゃないかなと思ってお聞きしておりました。ありがとうございました。

それでは、白戸委員、お願いします。

○白戸委員 白戸でございます。私も28期、いろいろと議論をさせていただきまして、いろんな立場上、審議会に出ているんですけども、これほど刺激で皆さんが活発に議論

される審議会も珍しいかなというふうに感じますので、この審議会に参加させていただきまして、改めまして本当にありがとうございます。

まず、私が今回ずっと見てきて、今、皆さんのお話も聞きながら一つ思ったのは、やっぱりキーワードは、ポイントは東京都の課題にもあるんですけども、これやっぱり教育なのかなというところに最後は戻ります。

さっきいろいろ話していました。例えば、無関心の話、フラットの話、インクルーシブな話、そして今出ましたけども、自主性の話、こういった話も、やはりスポーツに取り組む今までの、どちらかというと行政とかそういうもののスポーツ概念、僕ら子供たちのときにはどちらかというと頑張れ、水飲むな、しっかり走れという世界から、今かなりいろんなもの、社会的にも考え方が変わってきたのかなと思います。

やはり、そういったものを変えていかなければ、我々このスポーツ審議会で一番テーマに持っていた、例えば、スポーツの実施率を向上させていくというのも、根本的にスポーツに対する考え方が変わらなければ多分変わらないと思うんですよ。いくら場があっても、いくらベネフィットが、もっと健康になりますよといっても、やっぱりスポーツに対しての考え方を変えていく、これはやっぱり教育の力。

例えば、日本の教育の中でもやっぱり、もちろん競技、人と競うというのもスポーツの一つですけども、人と競わないのもスポーツの一つだと思うんですよね。自分と向き合うのもスポーツだし、そういった何か本来のスポーツの在り方みたいなところをやっぱり考えて、教育の中でしっかり織り込んでいかないと、結果として今、スポーツ嫌いをつくってしまったのは学校体育なんですよ、やっぱり。

学校体育の在り方というのは、やっぱりいま一度、もう一度考えて、スポーツから離れないというか、スポーツって好きとか嫌いじゃなくて、自分の体と向き合う大事な時間なんですよ。自分が生きていく中で、自分の体とずっと生きていくわけですから、やっぱりその体と向き合えないなんて悲しいじゃないですか。だからこそ大事なのがスポーツなんですという考え方になれば、別に人のためとか、健康のためとか、そういう話じゃなくなると思うんですよ。

その辺のやっぱり小さな、大人を諦めている訳じゃないですけど、まず今の小学生、中学生というところから変えていけば、その子たちが大きくなったときには必ずスポーツの概念って変わっていくのかなというのが一つ思います。

それと同時に、やはり先ほどから出ております、支えるとかボランティアの定義に関

しても、やはり教育の中でスポーツというのは、実はこうやってぐるぐる回っているんだよということを最初からしっかり教育の中で教えていくということ。これもやっぱり一つ必要なことかなというふうに思っています。

あと、先ほど藤田委員からもありましたけども、やっぱりインクルーシブというのを僕は非常に大事だというふうに思っていて、ぼくは障害者、指導していたアスリートから言われたのは、子供たちの場に入ったときに、例えば、義足の子が子供たちの場に入ったときに、子供たちは最初ぎょっとするけども、すぐ興味津々で触りに来たりとか、いろいろな話をダイレクトにするんですよね。ところが、大人の世界にその選手を連れて行っても、大人の方々はもう周りでそーっと離れて何も触れないようにするんです。

これが日本の今の現状だと思うし、これってどうしても障害者と、障害者スポーツと健常者を分けて教育してきた弊害だと僕は思っていて、もともと子供たちの心の中に何も障害も偏見も何もないです。ただ、足が違う。何この金属、キカイダーみたいな足すごいね。そうでしょう、これあなたたちの足よりすごいのと彼女はそう、障害者のスポーツの選手は言うんですけども、そうやって普通に育っていけば、子供たちに何の偏見も障害もなく育つんですけども、やっぱり今の大人は分けて育てられたところがあって、どうしても偏見がある。やはり、ここに日本のインクレイシブル教育の欠損があったのかなという感じがしています。

やっぱりそういったところを変えていくこと、これパラスポーツ、パラリンピックをやったことで少し状況は変わりましたが、やっぱりこういったところも教育の大事な一つなのかなという感じはしています。やっぱりこういったことが、スポーツに対するこういったこと、障害者スポーツもそうですけど、そういった教育が全て変わっていくと、当然これ日本の今のスポーツが抱える問題というのも一つ変わってくるかなというのが思ったところでございます。大人を諦めていないんですけど、まずやっぱり教育というのがすごい大事かなというふうに感じました。

あとはやはり、一つ東京都でいうともっと地域に合わせた振興をやったほうがいいかなと。これ行政の悪いところなんですけど、できるだけフラットに、みんなどの市町村もフラットにやりたいというふうになるんですけども、そんなの無理なんですよね。地域、場所によって違う、住んでいる人も違うし、全員同じようにやろうとすると、結局全部つまらなくなるんです。これはスポーツでも学校もそうですよね。全部の学校で同じことやろうとすると全部つまらなくなっちゃう。

そうじゃなくて、この学校にはこんなすばらしい施設があるから、ここに特化しようとか、すばらしい指導者がいるから、この種目に特化しようとかというふうに、やはり地域とか場所とかによって、もう少し特徴を出したほうがいい。僕らの地域は何があるの。この施設が、アクアティクスセンターがあるんだったら、これもっとやろうよとか、奥多摩にこんな川があるんだったらもっと川の競技、もっとしっかりやろうよとかって、何かそういう地域特性とか、施設特性みたいなものに合わせたものに特化するやり方をもう少し考えたほうがいいのかなというふうには考えます。

あと最後に施設ですけども、東京都本当に先ほど宮地委員からもお褒めいただきましたけど、すばらしい施設がたくさんあります。なんですけども、残念ながらやっぱり新規恒久施設、特に海の森、先ほどもお話に出ました。いい施設なんですよ。めちゃくちゃ広くて、あんな海の広い公園、多分この中でもまだ見られたことない方も是非見て行っていただきたいんですけども、すばらしいんですけども、ハードはすばらしいんですけど、ソフトは弱い。ソフトが弱いというのは、使い方の問題。

今、いろんなスポーツに広げているんですけども、例えば、先日我々の東京都トライアスロン連合で水泳の練習会やりました。水泳の練習会、30人、40人泳いでも、使う場所ってほんのわずかなんです。でも、この日は東京都トライアスロン連合が使っているからカヌーは使えません、ボートは使えません。ちょっと待ってと。2キロあって、横幅何百メートルあるところの、ほんの一部しか使っていないのに、水域全部終わりです。

これが一例ですけども、やっぱりもう少しソフトをやわらかく使っていけば、まだまだ可能性がある。こんなに広くて、あんなに東京のど真ん中に広い水上公園があるわけですから、もっともっとこれは海の森だけじゃないですけども、工夫の仕方があるのかなというふうに思っています。

最後にやっぱり東京都というのは、政治のことでもいろいろやって、東京都がやると結構政府が追ってくるというのが今の状況であると思います。子供のサポートなんかも実際皆さんもご覧いただいている、そういうふうになっているので、東京都って意外とすごいというのが僕の実感でございます。

なので、今ここで東京都のスポーツについて、皆さんで議論を進めてきましたけども、東京都のスポーツシーンが変われば、日本のスポーツシーンは変えられると僕は思っています。だから、このスポーツ審議会に可能性があると思うし、是非今後皆さんで東京都のスポーツシーンを引っ張っていただいて、ひいては日本のスポーツ

が変わればなというふうに思っています。

どうもありがとうございました。

○松尾会長 どうもありがとうございました。やっぱり教育っていう問題をすごくやっぱり中心に考えていきながら、スポーツをどう広げていけるかを考えていくべきだという話ですとか、それこそフラットなというお話、フラットな関係なんだけれども、そこに特徴を生かしていくという、そういうセンスが大事なんじゃないかという教えだったかと思います。大変良い勉強になりました。ありがとうございました。

それでは、加藤委員のほうからお願いできますか。

○加藤委員 学校でのスポーツ大会のボランティアの活動の参加について、その経験からお話をさせていただきたいと思っています。

私が以前勤務していました東京都豊島区にあります城西大学附属城西中学・高等学校ですが、そのときの話でありまして、学校の部活動にインターアクトクラブという部活動がございます。

各地域にロータリークラブというのがありまして、インターアクトクラブを学校に奉仕の部活動として提唱してもらって活動をしています。池袋西ロータリークラブが城西大学城西中学・高等学校インターアクトクラブを提唱しております。

ご存じのとおり、ロータリークラブは国際奉仕、社会奉仕を行う組織でありますけれども、青少年に対する奉仕活動というのを行っておりまして、青少年の育成のためにインターアクトクラブを提唱しているというところであります。城西大学附属城西中学・高等学校のインターアクトクラブでは、奉仕の活動として私が在職中に東京マラソンのボランティアの活動をやってみないかというふうに生徒に声かけしたところ、やってみたいということだったものですから、当時記憶しているところになります、応募しましたら運よく当選するというので、5名が参加しました。そのような記憶です。

事前の説明会がございまして、苦労もありましたけれども生徒たちから奉仕の活動ができて良かったという単純なものもありますし、思い出づくりができた、その後の活動報告ができたということも喜びとしてありました。他の生徒にはできない体験だったというところもありまして、好意的な感想を得ることができたというところでもあります。

生徒にとっては、華やかなスポーツ大会のボランティアとして選ばれた。ユニフォームももらって参加できたことは何よりもうれしかったというふうに思っていると、私自身は感じております。

学校の一部活動がスポーツ振興のボランティアとして取り組みましたが、今後、中高生がよりよく参加できるようにするためには、例えば、マラソン大会であるならば、学校の陸上部員にボランティアとして声かけをする方法がよいかなというふうに考えております。

中高生にとっては、大会に憧れの選手が出場すれば学びにもなりますし、スポーツ大会の運営についても勉強になるでしょう。生徒自身が取り組んできた競技レベルを上げていくことや、競技を社会へ発展していく、視野を広げる意味でも有意義だというように考えております。

ただ、全ての学校の部活動に声がけすることはできませんので、開催地域とか、活動実績、例えば都大会ベスト32に入るクラブに声がけする方法などがあるのかなというふうに思うんです。

例えば、剣道大会なら剣道、卓球大会であれば卓球、奉仕全般であるならば、先ほどお話ししましたインターアクトクラブや奉仕のクラブを持っているような学校に声がけする方法があるのではないかと考えます。

以上です。

○松尾会長 ありがとうございます。ボランティア、支えるといったときに子供たち、先ほど委員からも教育のお話がありましたけども、子供たちから積極的に関わられるような環境、機会というものをどう考えていけばいいかというのをお話いただいて、ありがとうございます。

実は12時までの予定で今、進めておりますけれども、各委員の皆様方、大変貴重なご意見を今、いただいているところでございまして、皆様方のご意見、何かきっちりとお聞かせいただければと思いますので、ほんの少しだけお時間の猶予をいただけるとありがたいと思います。すみません、よろしくお願いします。

では、塩見委員、お願いいたします。

○塩見委員 私、初めて参加いたしますのに、総括についてお話をさせていただくのは甚だ恐縮ではありますが、スポーツの場の拡大ということで申しますならば、やっぱりなかなかスポーツをやる機会がないというのは面倒くさいとか時間がないというんであれば、やっぱり会長も携わっています、日レクの理事でいらっしゃると思うんですけど、そのレクリエーションスポーツだとかニュースポーツといったようなものを活用していくというのも一つあるのかなと思ってしまして。

実は私も東京都のレクリエーション協会の会長をしておるんですが、やっぱり会員がかなり高齢化してきたり、体制の問題等もございまして、いろいろ課題はあるんですが、そういったものの活用というのがあるかと思っています。

あと、やっぱり施設についてですが、私どもの事業団も都立施設を管理運営させていただいておりますが、合わせて都立の18施設を連携事業として全てを、それぞれ紹介したり発信していくという事業を担当することになりまして、これをしっかりやっていきたいということで、今S P O P I T Aというサイトを設けまして、かなり力を入れております。

是非皆さんもご覧になっていただければというふうに思っています。2020大会が無観客であったりもしますんで。都民の皆さん等が実際のスポーツ施設を見たことがないということで、一つは今、施設周遊バスのツアーなどをやっているわけですけど、これは無料なんでいっぱい集まります。私、実は前職、コロナとともにバス社の社長を3年弱やっておりまして、バスが1台も動かない非常に大変なときもありましたんですが、内閣官房のオリパラ室にいた芦立さんがJ S Cの理事長に就任されたときに、わざわざはとバスに挨拶に来ていただきまして、このバスの多さにびっくりしたのか、いろいろ協力的なことを考えてくれて、当時オーバーレイの工事がまだあったんですが、新国立の工事をしていない日曜日を開放したことがあって、はとバスのツアーをそこに入れてもらったんですね。

そうしますと、非常に人気でして、本当に助かったんです。実は都立施設でも海の森は、これ周辺活性事業の一環でもあったんですが、既にバスツアーをやっているんで、今、カヌースラロームのラフティング体験、これは結構1万4,500円と高いコースなんですけど、そんなのもあります。ですから、日頃からスポーツに馴染みのない人も東京駅南口から黄色いはとバスに乗っていただきまして、そういった施設をめぐるということで、じゃあお前、事業団の施設はどうするんだというのはありますので、アクアテイクスセンターも休館日あたりで、日頃見れないようなところを見せられるようなコースが造成できないかとはとバスに話を持っていっております。

そんなこんなの話はとにかくとして、やはりその施設というのは、施設管理料をどうするかというのは今後の課題だと思っております。スポーツ施設があるからスポーツ利用する必要はないし、現状としてスポーツ利用をしていないのがいっぱいあるわけですから、でもやっぱりスポーツ利用はしっかりと確保しなくちゃいけない。その濃淡とか、

そういったものをどう管理の在り方として今後あるべきかというのは、やっぱり今後の課題として重要なのかなというふうに思っているところであります。

以上です。

○松尾会長 ありがとうございます。様々な角度からお話いただきまして、ありがとうございました。

原委員、お待たせしましてすみませんでした。原委員のほうからコメントいただければと思います。お願いします。

○原委員 時間も押し迫っているので、手短にいきたいと思います。

皆様方、先生方のご意見等々聞きまして、改めてスポーツは社会課題を解決できる力を持っているものだなというふうに改めて認識しました。この審議会を通して、みる、する、支えるスポーツの更なる向上を目指して、来期も是非皆さんとともに盛り上げていければなというふうに思います。

一つ私提案なんですけども、東京のアスリートの活躍という項目があったかと思いますが、是非私の専門分野、駅伝、長距離走、広島で行われる広島都道府県対抗男子駅伝、京都で行われます京都の女子駅伝、これは東京都、一度も勝っていないんですね。これは中学校から高校、大学、社会人と襷をつなぐ駅伝でございます。これも都道府県対抗ということで、都を代表して行う競技でございます。もし私に総合プロデュースを任せていただけるのであれば、必ず勝たせますので、喜んでいただける競技かなというふうに思います。

最後に今、世界陸上行っております。この後、私2時から競歩の解説を行います。私、競歩を一切やったことがないんですけども、競歩に関心のない方にも、この競歩の魅力を伝えるということでゲスト解説を行う、2時から行いますので、是非皆さん、競歩に関心のない方も関心が持てるような楽しい解説をしていきたいと思っておりますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

そういうことで、ちょっと時間ございませんで、途中で退席させていただければと思ひます。

○松尾会長 ありがとうございます。是非2時からの、楽しみにしていきたいと。ありがとうございます。

それでは、延興副会長のほうからコメントいただければと思ひます。

○延興委員 先般、夜中に原先生のすばらしい解説を聞いてとても楽しかったです。競歩

の魅力が分かりました。ありがとうございました。

それでは、本題のほうですけれども、先ほど事務局のほうから、この2年間のまとめを伺って、非常にしみじみとしておりまして、この28期というのがちょうどオリパラの後をどうやっていくかという、すごく大切なスタートの2年だったと思うんですけれども、その中で今、伺っていて、その施設の有効活用もそうですし、国際スポーツも次々に大きな成果を出されているという東京都事務局のご努力に心から感謝を申し上げたいと思います。

とりわけ私の関与しているパラスポーツについては、今しみじみ思い出すと、10年ぐらい前にパラリンピックが決まりまして、じゃあパラを盛り上げるよといろんな事業を競技団体のところに行くと、もう自分たちの仕事だけで手いっぱいなのに、これ以上何もできないと。東京都さん、そんなことって今、盛り上げておいて、後で梯子外すでしょうと言われたんですね。いや、それはそうでしょうと。パラリンピック終わったら、きっと予算も削られるし、梯子外されますと。でも、だからこそうんと上げておけば、外されて落ちても今よりいいじゃないですかとって、説得してやっていただいたんですけれども。

結果、大会が終わった後も、もちろん華やかなイベントとかはちょっと置いておいても、着実にそのパラスポーツの分野の予算は充実していただいていることに本当に東京都の決意を感じて、大変ありがたく思っております。

来期に向けてということですが、そういう意味では来期はちょうど次の計画をつくる時期ということで、先ほどのスポーツの将来図をどう捉えるかということで、前回の計画のときにはオリパラに向けてどんどんやっていきましょうという一つ基軸があったと思うんですけれども、まさに改めてオリパラ後の東京に、スポーツをどういうものにしていくかというのが問われる期になるのかなと思います、気が引き締まる思いですけれども。

それにつけても、ちょうど来期の2年目、2025年というのが世界陸上もあり、デフリンピックもあるということで、オリパラとはちょっと違いますけれども、またそのいろんな都民の関心を盛り上げたり、新しいことをやるすごくいいチャンスだと思うので、是非やっていきたいなと、やっていただければと思うのと、個人的には、先ほど支え手のプロフェッショナルの話がありましたけれども、やっぱり支える側の指導者とか、人もそうですし、競技団体自体もパラリンピックですごく力をつけて伸びた競技団体もあり

ますけれども、青息吐息のところもたくさんありますし、これは多分、先ほどレクスポーツなども支え手がどんどん高齢化しているとか、一部の花形の競技以外のスポーツが全て抱えている問題だと思うんですが、やっぱりその基盤というか、支え手をどう、組織を支援していくかというところも、とても大事なテーマになってくると思いますし、先ほど藤田先生のおっしゃった、ボランティアの使い方の問題ですけれども、多分ボランティアを使いこなす体力も能力も、団体の側になんかだろうなと思うので、やはり競技団体とかスポーツ団体をきちんと支えていく体制をどう取っていくかというのが次の課題かなと思っております。本当に今期どうもありがとうございました。

○松尾会長 どうもありがとうございました。それでは、最後に一言、私のほうからも少しだけまとめの時間を少しいただければありがたいというふうに思います。

この２年間で、様々ご検討いただいたものが順調に進捗をさせていただいているということに、まずもって感謝したいと思いますけれども、その次の課題、そしてやっぱり今日は重要な課題をいくつかいただいたような気はしております。

一つは、やっぱりスポーツを楽しむということの多様化、今日の中でシームレスとかフラットな関係をとというようなお話もありました。どんなビジョンを描けるんだというお話もありましたけれども、する、みる、支えるということから、今日の支えるところでも出てきましたけど、応援するという、応援の文化という問題をどうやってこれからつくっていくのかというのは、一つの大きな今後の課題になっていくだろうなというふうにも思われます。

あるいは、スポーツ庁が言っておりますような、つくるという、それは関係をつくったり、新しいスポーツをつくっていく、新しい関係団体もつくっていくというようなことも含めてかもしれません。そういうこともあろうかと思います。応援する、つくる。そして、多分これからeスポーツをどういうふうに扱うんですかという話は必ず出てくる話だろうと思いますので、ここは慎重に、でもいいものをきちっと入れていくというような方向が多分出てくるだろうと考えてところでございます。

それから、二つ目は、やっぱり質と量の話にしっかり持っていけないといけない、先ほど質の担保という話もあったかと思いますが、今までは実施率をどうやって増やしていくかという、量的なものをやっぱり追い求めていたところがありますよね。

ただ、やってくださった方が、本当にその人が幸せになっただろうかという、最近ウェルビーイングという言葉が躍っておりますけれども、本当にそれを行ったことで都民

の生活文化が豊かになったのかという観点での質の見方というんでしょうか。この辺は多分これから、もっと重要視されていく、それこそが成熟社会において、あるいは東京都であるからこそできる事柄になるのではないかなというふうに思います。

3点目なんですけれども、一つは、先ほどの質とも関わるかもしれませんが、すればいいという話から、例えば、健康づくりの話で私も必ず何歩歩いたかなというのを常につけているわけですけど、会議だけ今外しておりますが、またすぐつけますが、それに管理されているわけなんですけれども、そのときに毎日毎日のように情報が錯綜して、卵がいいよ、卵は駄目だよみたいな、何かよく分からない情報、様々にありますし、運動これぐらいがいいよ、こうしたらいいよという情報いっぱいあるわけですね。

だから、そこで求められているのは多分これから都民の皆様方がリテラシーをしっかり持つことなんではないかというふうに思います。知識、技能をしっかり知るだけではなくて、それを運用する力というんですかね。子供たちもそうだろうと思います。最近フィジカルリテラシーという言葉が第3期のスポーツ競技計画にも入りましたけれども、そのフィジカルリテラシーをどういうふうに私どもは捉えて、都民の皆様方全員に持っていただけるような施策をする。だから、民力を高めるといっていいんでしょうか。スポーツ力を高める。リテラシー力を高めるといいんでしょうか、そういうような方向性も少し考えていかなければならないのかなというふうに思ったところでございました。

いずれにいたしましても、この第28期の会議は本日までとなりますけれども、各委員の皆様方と、先ほど白戸委員もおっしゃってくださいましたけど、聞いているだけで勉強になるなと思っておりますね、本当に様々なご意見を頂戴して、大変感謝しているところでございます。とりわけ藤田委員、それから大日方委員につきましては、8年間の長きにわたりまして、本審議会をお支えいただきまして本当にありがとうございます。

これからも東京都のスポーツの更なる発展に向けまして、今後とも是非お力添えいただきながら、都民一人一人の皆さん方のためのスポーツをどう考えていけばいいかということ、これからますます皆さん方と検討しながら進めていければというふうに思ったところでございます。本当に2年間でございましたけれども、ありがとうございました。

それでは、本日の議事を終了したいと思いますけれども、進行を事務局のほうにお返しいたします。どうぞよろしくお願い申し上げます。

○巻口企画調整担当部長　ありがとうございます。本日はお忙しい中、貴重なご意見頂戴

いたしまして、ありがとうございました。本日いただきましたご意見等を踏まえまして、今後の施策や計画に生かしていきたいと存じます。

また、本日 8 月 24 日は、東京 2020 パラリンピック競技大会の開催日に当たりまして、パラスポーツイベント、T O K Y O パラスポーツ F O R W A R D が開催されております。お配りしております、こちらの A 3 のチラシでございます。

ちょうど、この建物の下で実施しておりますので、お帰りの際に少しでものぞいていただけたら幸いです。希望されます皆様は会場までご案内させていただきますので、お申し付けください。

今回をもちまして、第 28 期審議会は終了となります。皆様には 2 年間にわたりご協力をいただきまして、また、様々な貴重な意見を賜りまして、厚く御礼申し上げます。本日は誠にありがとうございました。

午後 0 時 12 分閉会